



\* 0054770000 \*

0054770-000

556-157-(5)

老嫗夜譚

佐々木喜善・著

郷土研究社

昭2

AID



556

157



30.7.27



2-53



郷土研究社第二叢書

[5]

老嫗夜譚

佐佐木喜善著







自刀江谷石之





## 自序

大正十二年の冬(舊の正月)、村の<sup>ハネイシタニエ</sup>三石谷江と云ふ婆様と親しい知合になつたお蔭で、かなり多くの昔話を聴くことが出来た。私は未だ嘗て此時位の好收穫を得たことがないのであつた。手帳が二冊三冊と段々に殖えて行くのが嬉しかつた。

私は婆様の家に、一月の下旬から三月の初めまで、ざつと五十餘日の間殆ど毎日のやうに通つた。深雪も踏分け、吹雪の夜も往つた。村の人達には今日もハア馴染婆様の處へ往くのしかと言つて笑はれたりした。

或日などは早朝から夜の十二時過ぎまでも其人と爐傍に對向つて居たことさへあつた。最初の中は婆様も氣兼ねと臆劫からさう話も進まぬ勝ちであつたが、しばらく



く經つと却つて婆様の方から、ごうせおらが死ねば鹽ノ端(村の墓場の在る所)さ持つて行つたつて誰も聽いてくれ申さめから、おらの覺えて居るだけは父さんに話して残したい。父さんもどうじよ(何卒)倦きないで聽いてくなさいと言つた。勿論私は倦きる處の話ではなかつた。(私のことを婆様は父さんと言ふが、これは私の家の子供等がさう言ふのを部落の人々が直ぐさう言ふからで、他ではトト、トツチャ、チャナと謂ふのと區別が立つてゐるから遂呼び易いものと見えた。)

何しろ外はあの(年の)大吹雪なので、少しの隙間からもびゆらびゆらと粉雪が大膽に屋内に吹き込んだ。見る間に子供等の悪戯のやうな細長い白い山脈が室の中に幾つも幾つも出来上つた。それを防ぐために雨戸をびしびしと締切つてゐるので、屋内は誠に薄暗くて、差向ひの婆様の顔さへやつとぼんやり見える程度であつた。それに寒からうと云ふので、爺様や孫娘などが生木を抱えて來て爐にござん焚いてくれた。その火明りが晝間ながら丁度夜更けのやうな氣持ちをさせた。おまけに

薪が雪で凍つてゐるので、ぶしぶしと煙つて、煙くつて眼が開かれぬ程であつた。婆様は赤たゞれした眼から涙を止め度なく流し、私も袖で顔を蔽ひ蔽ひ話を聞いた。

谷江婆様は七十になるか或はそれを二つ三つ越したかも知れない。代々私の村の丸古立と謂ふ所に家があつた。相當の地所もあり家もあつたが何故か此婆様はひどく不幸であつた。私達の子供の時に此人の先夫が山で木に撲たれて擔がれて來て死んだことも臆ろ氣に覺えてゐる。子供が無いので今は外から養子を貰つて多くの孫共をもうけて居るが、眼が悪い故かいつも泣いて居るやうに見えて寂しかつた。

若い時には女振りもよくて相當唄はれたと謂ふが不幸にしてひどい毒にかゝつて今も首の周圍にえらい彫刻の痕を残してゐる。だが大の秘事念佛信者であつて決して偽言などは弄せぬ正直な婆様である。私は子供の時分から此婆様を好きではあつたが、いろいろな事情から遂これまで親しく話したことがなかつた。ところが其年



の一月の下旬に、嘗て村の犬松爺イヌマツと云ふ人から聞いた昔話の中に、醫者が道中して洪水に出會ひ水に溺れて死にかゝつてゐる蛇と狐と人間とを救助して四人旅を續けて行き、遂に或王様の城に客人となつたが、人間のざん言で醫者は牢屋に入れられた。それを蛇と狐とでうまい計略を廻らして恩人を助出すと謂ふのであつたが、其の内調を忘れたので、或る雪の白く光る日であつたが、小さな森を通つて此話をしてくれた爺様の許に訊きに行つた。すると僅かな間に何もかにも忘れてしまつて爺様は誠に氣の毒がつた。此雪にわざわざ来てくれたのにと言つて往來まで私を見送つてくれたりした。そこで又米爺ヨネと云ふ昔語りに行つたが、此爺も知らぬ譚であつた。仕方がなくなつて此婆様を訪ねた。やつぱり知らなかつた。私はまづまづ此譚はそれでよいが、婆様は炭焼長者の話を知らぬかと言つたのが起縁であつて、其話は第一番目に聞いた。

こんな風で此婆様から聞いた話は、口碑傳説等までを交へて、總てで百七十種ほどであつた。そして其話の大部分は、婆様が子供の時、其祖母から聞いたもので、おらの祖母のお市といふ婆様はまだまだおらの三倍も四倍も話を知つてゐた。おらは頭がええからさつぱり忘れてしまつたと言つた。

谷江婆様は此お市婆様(私等は知らぬ遠い人)の一人孫であつて、其頃村では見たこともない赤い細帯シヨキに振袖の美しい衣装を買つて貰つて秋の八幡祭りに著て行つたことなども話してゐた。私の祖母様はそれは智慧のあつた人で、心經も觀音經も暗で讀んだ。祖母様はおらも若い時には美しい女子ヲメゴで、おれの名前をかう云つて歌はれたものだと言ひながら左の即興を作つたことがあつた。

追ひつ(お市)追はれつ追はれつ追ひつ

短かくたのしむ夜の蟲

さう謂ふ祖母から夜々聞いた話であつたが、また其外にも村のブゾドの婆様は物識りで昔噺を山程知つて居る人からも聞いた(此人も編者などの知らぬ遠い人)。シ



ンニヤのおみよ婆様、横崖ヨコガケのさのせ婆様、大同のお秀婆様などからも聞いたが追懐して居た。それら婆様達の何れも皆今は亡き人々である。即ち鹽ノ端シホノヘ往つた人達である。

私(佐々木)の七八歳頃までは此三人の人達はまだ生きて居た。私もンニヤの婆様には正月の鏡餅を持つて昔話を聴きに行き、裏口の敷居が高いので上るに兩手を掛けて這ひ上つたことなどを記憶して居る。横崖の婆様は小便臭くて、私の家には秋毎に粟の穂切りに來たが、私は遂に側には行かなかつた。今になつて残多い思ひに心を責められる。大同の婆様は巫女婆様と謂はれた人で、私にいろいろな呪詛の文句や傳説等を聴かしてくれた。オシラ神のことは此人から聞いたのが十一二の時に、野火で焼けた跡の野原に青々と萌え出た布葉フナバ摘みに行つて居て、摘草を入れる筈を彼方此方に持ち運ぶ役をしながら私は熱心に話を聞いたのであつた。

谷江婆様はニソ(新麻)を、指の先きと唇とで巧に細く烈き分けて、長い長い一筋の白子絲シラゴイトを作つた。それを苧籠フムケに手繰り入れつゝ物語つたが、話に興が乗つてくると、其苧籠をばくると己が背後に廻してやつた。さうなると言葉には自らりずむがつき、自然と韻語になつて同じ文句がしばしば繰返されたりした。或時などは少量の酒を買つて行くと、平素物靜かな人ながら興奮して、老いたる腰を伸ばしてちよいと立ち上り、物語の主人公の身振りなどをした。それがりずむが高調に達した時であつたから少しも不自然でなく、却つて人を極度に感動させた。私は其感動を筆記し得なかつたのが、此記録の最も大なる憾み事である。尙又私としては婆様の語つた通り、其儘の地方語で記録することが好ましいとは思つたけれども、さうすれば大方の讀者には往々合點のゆかぬ節もあらうと思つて、本文の如き文體にした。

けれども元々昔噺の蒐集は、他の短い筋だけでも宜しい處の口碑傳説とは自ら其



性質を異にしてゐるので、お互の其日其時の氣分次第で、其成績にも亦幸不幸があつた。全く機會の問題であつた。此婆様の家にざつと二箇月も通ひながら、朝から夜まで爐傍に坐つて世間話ばかりして、肝腎の嘶を一つも聴かなかつたことが十日以上もあつた。又調子づいた幸運の日になると十も十三も聴いたこともあつた。物語の蒐集の容易でないことを泌々と思はせられた。

聴いた話の中から此度百三種の話を此集に取入れることにした。文章は自分ながら幾何も工夫の餘地があると思ふのであるが、併し奥州の山里の百姓婆様の話はさう洗練されて居なかつた。たゞたゞしく。語句が重複したり語呂の拙劣であつたりするのは、私が如何に蒐集者として正直であるかと謂ふことに免じていたゞきたい。これは一には自分の心の記念とも思つて聴いた時の調子をいくらかでも保存して置きたかつた。それで婆様が好んで使つた語、ひじやうにとか感心してとか謂ふ言葉

も所々に入れて置いた。氣分を大事にしたかつたからである。

此話の草稿を書き始めた時は、大正十二年の秋頃であつたが、其中に思ひがけぬ私の周圍の變化や病氣の爲に、例に依つてするする延びて今日に及んだ。今度娘の病氣療養の爲に村を離れたから、此機會に稿を編みたいと思つた。

それに就いて譚をば似寄つたものを區別して見ようかと思つたが、其等も中止して非學問的であらうが無からうが、婆様から聴いた順序の儘に配列して置いた。さうするのが追懐も深く且又心安く自然でもあつたから。

それから書名とは少し撞着する嫌ひはあるが、私が婆様の處に行つて昔嘶を聞いて居ると謂ふことを聞傳へて、村の話好きの連中が集つて来て、ぼつぼつ話して呉れたものもざつと三十種程あつたが、それも婆様の話の合間合間に、聴いた通りの順序に差しはさんで置いた。いつかの機會を得て尙此集の續篇を取纏めて發表したいと思つて居る。



それから話の題である。これは婆様も其他の人達もいきなり話に取りかゝつて筋を進めて行くので、何れにも題などは無いのであつたが、私は整理の便宜上一時假りに附けて置いた。然し私の附けた題が、どうも内容とびたりと填まらず、且つ不自然であるやうに思へ、氣持ちが悪かつたから、餘程番號だけにして置かうかと考へたが、それでも又餘りに物品扱ひのやうでもあり氣障でもあるやうだつたから、件のやうにした。拙劣な、くだらない暗示を出すよりは、却つて其方が宜かつたかも知れぬと今思つて居る。

尙書名も獨り婆様から聞いた話を集めたのでも無いから、總括して奥冬夜譚とでもしようかとも思つたが、併し老媪夜譚でもさう無理では無からうと思つて、其儘にした。

終りに私の遅筆に對して、再三の厚い御注意と刺戟とを與へて下さつた、柳田國男先生や岡村千秋氏に深甚なる感謝を表します。

今、今年夜めての烈しい雷鳴を聴きつゝ、そして又郷里からの父方の祖母の死去の電報を見て痛く驚きつゝ、此の記事を書き終る。

昭和二年五月五日、仙臺の北三番町の旅舎にて。

佐 佐 木 喜 善



目次

自序

一 雉子ノ一聲の里	一
二 炭焼長者	九
三 一目千兩の女	三
四 黄金丸犬	六
五 蛇 <small>鞆</small> の聲	六
六 木佛長者	三
七 菌の化物	七
八 人買船	三
九 蜘蛛女	三
一〇 蜘蛛の青入道	一



二	蟹の報恩	二
三	雌鶏婆	三
三	鶏長者	三
四	淫娘	四
五	娘の骸骨	五
六	倒娘	六
七	鰻婆	七
八	骸骨の仇討	八
九	歌ひ骸骨	九
一〇	熊井勇軒	一〇
一一	三眼一本脚の化物	一一
一二	天狗の小扇	一二
一三	聴耳頭巾	一三
一四	嫁の毒害	一四

一五	親棄譚	一五
一六	頓平稻荷と八幡狐	一六
一七	跛狐	一七
一八	犬と狐の旅行	一八
一九	狐の報恩	一九
二〇	二人の博奕打	二〇
二一	雀の仇討	二一
二二	權平稻荷としよんべい稻荷	二二
二三	蛇男	二三
二四	三人兄弟の願掛け	二四
二五	猫寺	二五
二六	岩泉の里	二六
二七	雁取爺の後日譚	二七
二八	鬼の子小綱	二八



三	葦子萱子譚の後譚	一三九
四	桶屋の昇天	一四三
四	人喰ひ花嫁	一四四
四	繼娘茶碗子	一四九
四	鹿娘の梗概	一五二
四	死衣の片袖	一五四
四	和尚と下男(一)	一五三
四	猫 貞	一五五
四	娘の生命延ばし	一七一
四	見透しの六平	一七四
四	二人の金毘羅詣り	一七六
五	遊 女 狐	一七九
五	話 買 ひ	一八二
五	和尚と下男(二)	一八五

五	狐と小僧	一八六
五	左片目の爺	一八八
五	狐と爺様	一八九
五	山 鳥 爺	一九〇
五	繼子の出世	一九二
五	瓢箪の光物	一九六
五	奈良ノ梨	一九七
六	南瓜の始まり	二〇二
六	寶物の旅	二〇四
六	狐の貸金	二〇八
六	和尚と狐	二一〇
六	庄五郎の出世	二二三
六	善 平 長 者	二三五
六	坪石長者	二三九



奪氏 神 娘……………二二二  
 六 笛吹き勘之丞……………二二三  
 充 鬼の假面を被つた娘……………二三〇  
 七〇 分別八十八……………二三三  
 七 囁ひ骸骨……………二三五  
 三二 二反ノ白只取……………二三九  
 三 馬 鹿 息 子……………二四〇  
 四 大岡裁判實子調……………二四三  
 五 部屋の始まり……………二四六  
 六 コン吉馬鹿……………二四九  
 七 狼 と 犬……………二五七  
 八 鳥 吞 爺……………二六〇  
 九 蜘蛛 息 子……………二六五  
 〇 坊様の餅食ひ……………二六九

一 坊様と夫婦者……………二七〇  
 二 伊勢詣と油賣……………二七二  
 三 馬鹿の始まり……………二七三  
 四 馬になつた男……………二七四  
 五 鱈の報恩……………二七八  
 六 小僧の馬賣……………二八六  
 七 尼 足……………二八七  
 八 鴻ノ巢女房……………二八八  
 九 鹽 吹 臼……………二九三  
 〇 一文字屋藤七……………二九九  
 一 馬 放……………三〇二  
 二 餅 焼……………三〇四  
 三 三人旅の歌詠……………三〇六  
 四 爺と黄金壺……………三〇七



壺	金持爺婆	三〇八
蛙	壺	三〇〇
生付きの運		三〇一
馬鹿鹿	犢	三〇三
猿になつた長者どん		三〇五
瘤	取爺	三〇九
炭ノ倉長者		三三三
雷神の女郎買		三三五
笛吹藤平		三三七

説話者 辻石谷江刀自(玻璃版)……………卷頭

# 老媪夜譚



雉子ノ一聲の里

並所一處をな夫婦があつた。女房は懐妊中であつたから夫は薪取りに山に行つたがもう少しも少しと思つてゐるうちに日が暮れて還れなくなつた。そこで或る洞の大樹の下に寄つて泊つて居ると、夜半頃にイリ(深奥)の方から、ジャンガゴンガと馬の鈴の音やホイホイと謂ふ人間の掛聲などがして、賑かに遣つて来る物の音がした。不思議に思つてさげしんで居ると、其音がだんだん近づいて来た。そして其大樹の前迄来ると立ち止まつて、さア山ノ神殿参らうか時刻トキに遅れてはならぬと

雉子ノ一聲の里



言つた。すると其樹から聲が出てヤア塞<sup>サイ</sup>ノ神殿で御座つたか筈<sup>ヘキガミ</sup>神殿も御一緒かと言ふと、外ではあゝ一緒に參つたと返辭した。其樹は、實は今夜俺の所に客來があつて往かれぬからお前達に良き程に頼むと言ふと、さうか客來かそれでは俺等ばかり行つて來ると言つて神々は又ひどく賑かな音をさせて其處を立去つて行つた。そのうちに夜が明けると、又其處に彼の神々が還つて來て、山ノ神殿今還つた。實は森平が女房だけであると思ひ違ひして往くと、其隣家の女房も今夜であつたので手間取つた。併し何れも安産であつたから歡んでくれ。而して森平所のは男の子だが一日に藁一本の持ち運、隣家は女の子ではあるけれども九十九の寶が付き、其日々々の使ひは鹽三升程である。塞ノ神殿が取持つて夫婦にすべと謂ふのだが、お前は如何思ふかと言ふと、山ノ神は一も二も無く同意した。そしてそんならばそんならばと別れて行つた。其一部始終を聽いて居た森平は不思議なことも有ればあるものだと思つて、翌朝早く山を下りて還つて見ると、家には昨夜お産があつて男の子だと

言ふ。それではと思つて隣家に急いで往つて見ると、矢張り昨夜お産があつて女の子が生れたと言つてゐた。これは同日同夜に男女の子が一度に生れると謂ふことが吉相だから行末は二人を夫婦にしようと言は直ぐに纏つた。

二人の子供は成人して夫婦となつたが、女房は大量で己<sup>オノ</sup>れも飲み人にも酒を飲ませ、又錢金などもざんぶと使ひ、世間手廣く取引もして、段々物が蓄<sup>タカ</sup>り倉小屋を建て並べる其數は丁度九十九戸前に成り及ぶ長者となつた。それに引替へ夫は小心者で、あと一戸前の倉を建てれば百戸前の倉持の長者となるが、何とも女房の使ひが荒くてそれも叶はぬ、何とか女房の大量を戒めたいものだと思つて居ると、或日旅の六部が來たから、旅の六部に其事を伺ひ立てると、それは造作も無いことである。月の十五日の朝の朝日の押開きに、九十九戸前の真中の土藏の屋根の上を見ろ、九十九戸前の其真中の土藏の屋根の上には朝日の影に紫の垂衣を被た小<sup>コ</sup>人の翁等が三人で赤い扇をひろげて朝日の舞をば舞うてゐる。其三人の中の真中の



翁の左の膝節をウツギの弓に蓬の矢で射れ、さうするならお前の思ふやうになると  
 教はつたので、夫は萬事仕度を整へて月の十五日の朝を待つて居た。やがて程無く  
 月の十五日ともなつたので、朝日の押開きに九十九棟の真中の土藏の屋根の上を見  
 ると、如何にも三人の小人の翁等が赤い扇を押開いて東西南北を打ち招ぎ、朝日の  
 舞をば舞うて居た。夫はこゝぞと思つてウツギの弓に蓬の矢をば差しつがへて其真  
 中の翁の膝を射ると、左の膝は射折れて忽ち消え失せてしまつた。ところがそれか  
 らはがらりと變つて貧乏になり、女房も好きな酒も飲めなくなり人の出入も無くな  
 つた。そこで夫は怒つて是も皆女房の悪い故だから別の女房を持替へると言つて、  
 女房に下婢を一人附け添へて家から追ひ出した。

女房は下婢を連れて何處へ云ふ當も無く行くと、其中に日は暮れて暗くなり、  
 歩く力も今は無くなつて路傍に下婢と共に一夜を泣き明かした。そして夜明となつ  
 たから草の上から身を起してこれから何處へ行くべと物語つて居ると、其處に若い

美しい娘が三人通りかゝつた。女房は娘達に何處へ行きますと問ふと、私達はこれ  
 から彼の山越え此の山越え雉子の一聲の里へ行く者で、二人は無事であります、  
 一人の娘は足を痛めて難儀をしますと言つた。其雉子的一声の里といふ所に己等も  
 行つたならと思つて女房主従は三人の娘の後を慕つて行くと、山路が峻しくて行き  
 悩んで居るうちに其娘達の姿をば遂に見失つてしまつた。そのうちに又日が暮れて  
 今夜も此處に野宿かと思つて居ると、遙か向ふに火の明りが見えたので、それを頼  
 りに行つて見ると其處には立居も出来ないやうな破屋があつて、内に娘がたつた一  
 人居るから、今夜一夜の宿を頼みますと言ふと、娘は御覽の通りの破屋で食事の物  
 も夜具の調度もないが、これから何處へお越しなされることも此夜路故難澁であり  
 ませうからお泊りなさいと言つた。女房主従は歡んで内に入ると、爐ヒボトに掛けてある  
 のは三升入り位の古釜たつた一つであつた。娘は何も無いから大根を取つて来て煮  
 て上げませうと言つて外に出たが、直ぐに見事な大根を持つて来て釜に入れて煮て



くれた。それを食ふと甘露の味がした。さうして泊つて翌朝主従が目覺まして見ると娘は居らないから留守の所から立つのもどうかと思つて居る中にもはや晝頃になつた。そこで下婢が昨夜の大根畠に行つて見ると事の外見事な大きな畠で、昨夜娘が抜いた所の跡からは水がこんこんと湧き出てゐる。咽喉がかわいて居るので其水を掬つて飲むと香りの高い酒であつた。下婢は直ちに其事を主人に知らせして諸共に飲んで快く酔うて眠つてしまつた。さうして夕方になつて目を覺まして見ても未だ娘が歸つて來ないので、二人は畠から大根を取つて來て煮て食べ釜には酒を汲んで來て飲み、其夜も其家に泊つた。又翌日になつたけれども娘は還らないので、主従は暫時此家に泊ることにして、下婢は私はこれから此釜に酒を汲んで町に持つて行つて賣つて來ると言つて、釜に酒を入れて町に持つて行き、酒や酒や泉酒やとふれて歩いた。さうすると町の人達は皆買つて飲んで見て、其味ひの佳いのに驚いて其酒の賣れること際限がなかつた。下婢は其代で種々な物品を買つて戻つた。それ

から泉の酒は益々湧いて盡きなかつたから、女房主従は忽ち大酒屋となつて家屋も建て並べ、人々も諸處方々から寄つて來て、其處が見る間に盛んな町屋となつた。また女房は酒屋長者の女主人と相成つた。

話變つて森平の息子であつた先夫は、其頃にはもうひどい貧乏になつて、其日其日の生計も出來かねるやうな身代となつて居た。此頃雉子の一聲の里と謂ふ所に酒屋の大盡が出來て、其處の村屋がまことに賑かな所になつたと聞いて、草履などを作つて持つて行つて賣るべえと思つて居た。或日女房は草履賣りの爺を見ると、はて見覚えのある人だがどうも案じ出さぬ、誰であつたか彼であつたかと心訝しく思つて居ると、下婢は彼の人は先の旦那様でありますと言ふ。さても變り果てた御身の上不惑でならぬと、女房は黄金一升計つて藁に包み、これで草履を作つて來てくれと言へとて下婢に持たして遣つた。先夫は其藁を持つて家に歸つたが其夜は餘りに寒くてならぬので、其藁を爐にくべてあたつた。そして他からただの藁を才覺し



て来て草履をば作つて酒屋長者に持つて行く。女房は著物位は著替へて来るかと思つて居ると、元の通りの姿で爺が見えたので、今度はこれを食べながら行けと言つて結飯ムスビの中に小判を入れて與へたが、それも家への歸路に沼に鴨が下りてゐるのに石を拾つて投げ投げしたが、一つも當らぬので業ゴウを煮やして今度は其結飯を投げて歸つた。次に女房が見ると、またも爺が元の儘の見窄らしい姿をして来たので、さして運の無い人だと嘆いて、今日からは此酒屋の下男となつて居てはごうだと言ふと、それではさうすべと言つて、一生其處で暮した。

(一)サケシム。じつさ耳を傾けて物を聽いて居る態、輕蔑の意味ではない。

例、山さ緞砲打ちに行つて、雉子小屋さ入つてサケシンで居ると狐が来たさ謂ふやうな譯。

大正十二年一月二十一日よりの聽話であつて、以下婆様より聽いた話には別段の記號も付けずたゞ所々に月日を記して置く。月日の附記無きものは前のと同日に蒐集の分。

## 二番 炭 燒 長 者

或る鍛冶屋の女房が使ひが荒くて、弟子ごもまでも何不自由の無いやうに錢金を與へるので、夫の鍛冶屋は此女房を置いてはとても富貴にはなれぬと言つて、三つになる男兒を添へて家を追出した。女房は今更里に還つたとてええ面ツラも無いとてそれから旅に出かけた。或日道に迷うて奥山に入り込み、彼方此方と歩き廻つてゐるうちに夕方になつたから、向ふに見える炭燒竈の煙を頼りに行つた。炭竈に辿り着いて見れば、小屋の爐ヒボトに小鍋が掛つてゐるが主は居なかつた。そのうちに歸るだらうと思つて小屋の前の石に腰を掛けて待つて居ると、やがて小屋の主が歸つて来たが見るも穢キタナらしい爺であつた。其人が歸つて来たかと思ふと又何處かへ往つてしまつた。そのうちに山氣サンキが籠つて来て肌寒くなつて女房は困つて居ると、漸く其爺がやつて来て、此變化物ヘンゲモノがまだ其處に居たかと言つた。女房は私は決して變化物な



どではない、旅の女であるから今夜一夜ごうぞ泊めてくさいと言ふと、爺は眞實  
お前は人間か、そんなら内ウチに入つても宜い。たゞ此鍋の飯が、今夜俺一人で食へば  
翌朝アシタも煮なくてもよいと思つて居たが、お前と二人で食へば朝には何にも無くな  
ると甚だ當惑顔で語つた。女房は、明日の物は私は又ごうとも致すからと言つて、  
其夜は小鍋の飯を二人で食べた。さて翌朝になつて女房は懐中フトコロから金カネを出して、こ  
れで米を買つて来てくれるやうにと言ふと、爺はそんな小石で何で米などが買はれ  
べ、炭ならば兎に角と言ふ。女房は否々イニエこれは小石では無い、小判と謂ふ寶物だと  
言ふと、爺はまたこんな物が寶物なら俺が炭焼く竈の邊は一體に小判だと言つて笑  
つた。兎に角そんならそれを持つて行つて見ますべえと言ふ。女房は此お金ヒトツ一個で  
米魚古衣二三枚もと書いて爺様に持たせて町へ遣つた。

女房は爺を出して遣つた後、先刻爺が言つた言葉を不審に思つて、炭竈の邊に行  
つて見ると、炭竈の邊に黄金が積まつてゐる。其黄金を一日中小屋に運んで入れる

と小屋一杯になつて入口から外へ溢れ出た。さうして居るうちに暗くなつたが、そ  
れでも爺様はまだ還らない。待つて居ると爺様は何事か獨言を言ひながら還つて來  
たから、これはどうしたと訊くと、俺は途中で餘り腹が空つて堪らぬから俵  
から米を取つて食ひ食ひ來ると、俺の後からも人が附いて來るから、其人にも一掴  
みづつ投げて遣りながら來たますと言ふ。どれ何處に其人が居ると女房は聞くと、  
それそれまだ其處に居ると言ふのを見ると、それは爺様の影法師であつた。けれど  
も女房はそんな風な人でも嫌はないで一緒に居て、それから黄金でごんごん米を買  
ひ樵夫を頼んで來て木を挽かせたり、大工を頼んで來て家小屋を數多建て並べて、  
そこで炭焼長者よと呼ばれる程の身分になり、其邊には數多の村屋が建ち盛サカつた。  
話變つて、先夫の鍛冶屋は女房を離縁した後は、鎌を打たうと思へば鉞サカとなり、  
鍬クワと思へば斧になる。斯うケチが入つては錄な仕事も出來ぬので、乞食になつて廻  
り廻つて來た所が炭焼長者の門前であつた。門口カドグチに立つて御報謝を乞ふ乞食の姿を



見ればどうやら見覚えのある顔であるから、女房は熟々視ると、それはまぎれの無い先夫であつた。それは先夫であつて見れば可愛想であるから、米三升遣つて之が無くなつたら亦来いと言ふた。又次ぎに見えた時、炭焼長者の夫に話すと、さうかそれでは俺が出て話しては拙いだから、何氣なく此處に居るやうにお前から言へと言ふので、女房は乞食爺に、お前はさうして世間を歩くよりも此處に居て此家の下男となつてはどうかと言ふと、鍛冶屋は何にも知らぬから歡んで炭焼長者の所で一生を送つた。

### 三番 一目千兩の女

或所に兄弟三人あつて父親から千兩づつ貰つて修業の爲に家を出た。二人の弟等は夫れ相應に立身して家に歸つたが、總領だけはなかなか歸らなかつた。何處に何

をして居たかと謂ふと次のやうな次第。

其總領は父親から貰つた千兩の金を持つて都ミヤコに上ると、或る立派な構えの家の表に、一目千兩の女と謂ふ看板が掛かつてあつた。是は珍らしい見物ミモノもあるものだと思つて其家に上ると、座敷の綺麗なこと、其奥には錦の幕を垂れ下げて、其内に美しい女を置いて、錦の幕を靜かにしづしづと引上げて、上げたかと思へば直ぐに又靜かに下げて、これで千兩であると言つた。

總領はさうして一目見たが、尙もう一目見度くて堪らず故郷に歸つて父に願つて又千兩の金を貰つて都へ引返し、先のやうに一目千兩の女を見た。二度見るとどうしても今一度だけ見度くて、故郷に使者を立て、千兩の金の無心を言ひ遣ると父親は非常に怒つた。それを傍で聽いて居た祖父は都からわざわざの使者を立て、まで見度い女ならよくよくの事であるべから、今度だけ俺が金を出して遣ると言つて手箱から千兩取出して使者に持たして遣つた。



總領は又それで一目千兩の女を見てしまった。あとは幾ら考へても策が盡きて、いつそ死なうと思つてうなだれて其家の門を出ようとする。内から人が出て来て一寸待てと言はれて一目千兩の女の處に連れて行かれたが、今は目を上げて見る力もないので其儘俯向いて居ると、女はもつと私の近くに寄れと言ふ。言はれて男は女の側に一寸摺寄り二寸摺寄り女の許に寄りかゝる。其時女は今迄一目二目とまで見てくれた人もあるけれども、三目見てくれた人はお前ばかりだから、お國への土産にこれを上げると言つて、そこに出したのは二枚折の小屏風と錦の袋に入れた紫の小扇一本であつた。此屏風を立て、置いて此扇であふぎましたらお前の思ふ事は何でも其處に出ると言つた。總領は女から其品々を貰つて故郷に還つた。家に歸ると家人や弟達は笑つて蔑み、誰も食へや飲めやと云ふ者もなかつたが、たゞ祖父だけは優しい言葉をかけて、自ら御飯などを出して食べさせた。

やがて月の十五日となつたので、總領は奥の座敷を綺麗に掃除しろと下婢に言ひ

つけたが、下婢は聞えない振りをするに、祖父は見兼ねて下婢を宥め自ら掃除を言ひ付けたので、下婢共も仕方なく濫々掃除をした。總領は床の間には別の掛軸を掛け替へる、柱掛を掛けるのと言ふ。下婢共はぶつぶつ言ふと、祖父は何でも總領の言ふ通りにしろと言ふ。さうして座敷の體裁がすつかり出來上ると、總領はさあこれから祖父様や父上に持參の土産物を御披露致しますと言つて、小さな風呂敷包を出し、其中から小屏風と扇とを取出して、小屏風を立て、から其扇でふわりふわりと扇ぐと、屏風の山水の繪の中に有る一本の樹木が、ずんずんと伸び上り成長して見る間に花を咲かせ、忽ちに大判小判の實をならせ、果ては微妙な音を立てながら散りこぼれて、奥の座敷が目も眩い黄金の間と變つた。祖父は歡ぶこと限りがなかつた。やつぱり總領は其家の世繼となつた。



四番 黄金丸犬

一六

昔、<sup>(一)</sup>沼宮内と云ふ所に松之助と云ふ手習師匠があつて、己れが教子が成人して伊勢参宮に上ると謂ふことを聞いて歡んで居た。ところが教子の面々は永年の恩師をも一緒に連れて行くべとの話になり師匠を誘ふと、松之助も其氣になつて承知した。そこで松之助は旅に出る前に焚木でも取つて置かうと思つて、山に行つて或る沼のほとりて木を伐つて居ると、沼の中から美しい女が浮び出て、松之助殿、松之助殿と聲をかけた。松之助は怪みて何事かと言ふと、女は懷中から一封の手紙を出し、實はお前が此度参宮に上ると謂ふことを聞いたから折入つてお頼みしたい。此手紙を大阪の近くのミヅロヶ池と謂ふのに届けて下さい。其沼には私の姉のオカルと云ふが住んで居ります。私は姉と十七になる時に別れたきり逢はぬので、せめては手紙でもと何年心掛けたことか分りませぬ。ところが丁度幸ひお前が此度の旅立を聞

いたものだから今日此處に参つて頂いた。妾の永い年月の想ひ事だから何卒叶はせて遣つて下さいと言ふ。松之助はそれを聞いて向ふの其池さへ分れば届けるがどうすればよいと言ふと、女は向ふの池は嫌でも妾がお前に分らせる。そして池のほとりに行つたなら水際に立つて一度手を打つてくれると中から姉が出て来る。さうしたら此手紙を渡してくれと言つて、預つた手紙の上書には女の名前をオミツと記してあつた。女は改めて言ふには早速私の願ひをきかれて大變嬉しい。これはほんの心ばかりの御餞別であると言つて、錢二百文をサシに挿してくれる。そして此錢はサシから皆取り切らずにあとに二三文残して置けば、一夜の中に又元の通りに成つてゐるから要心して使つて下さい。又向ふの池に参ると私の姉は御禮に金を上げようと言はうから、御金は取らずに別の物を貰ふとよいと言つた。

松之助は弟子達と参宮をして、上方へ廻り大阪に着いた時、これまで皆様に色々御世話になつて此處まで参つたから御禮心一杯づつ献上致し度いと言つて酒を



進めた。弟子達は師匠の貧乏を知つてゐるから懷中も乏しいだらうと是迄も再三宿錢なども案ずるが、其度毎に松之助は辭退をして來たので、學問の有る御仁は又我々とは全く別な御心掛けがあるものだと、皆感心して此處まで參つたのに、今夜はまた斯う云ふ振舞事で皆は飲んで飲んで酔うて其晩は熟睡した。それを見計つて松之助は、俺は途中に用事があつて一足先きに出掛けるから皆にさう告げてくれと言ひ置いて勘定を濟ませて、夜明方に一人立ちをした。

それからミゾケ池を尋ね當てて、奥州沼宮内の沼からの傳言だと、池のほとりに立つて手を拍つと、池の中から美しい女が現はれて、松之助が差出した手紙を見て、アヤ妹懐かしやと喜んだ。さうしてこれこれ此御金は眞の私の御禮心と言つて差出したが、松之助はそれを辭退した。すると女は思ひ煩つた姿して、それでは御金では無調法に當るかも分らぬが、これならお前も受取つて下さるだらうと言つて一寸四方の四角な小箱を與へた。此小箱の中には一匹の白い小犬が入つてゐるが一

日に米粒一つづつ食はせれば金を一個づつ返します。必ず一粒より多く食はしてならぬと言はれて、松之助は其小箱を貰つて池の女に別れを告げて其處を去り、途中で同行の者とまた行會つて無事に故郷に歸つた。

松之助はミゾケ池の主から貰つた小箱の白犬に竊に米粒を與へて金を返させ、日増に金が殖えて、五年目には五ツの土藏を家のぐるりに建並べた。其五ツの土藏の眞中の倉の大黒柱に小穴を掘つて其中に小箱を入れて置いて一日に一個の金の小粒を生ませてゐた。或日松之助の留守に女房が土藏に行つて其小箱を見付け、一度に多くの金を取らうと思つて米櫃から椀で一杯米を持つて來て小犬に食はせた。所が小犬が急にむくむくと大きくなつて、ただのあたりまへの物をべたべたと落した。

松之助は外から歸つて來て土藏に行つて見ると、ただの白犬が跳つて居た。これはどうした事かと驚く主人の顔を白犬は見て、私は云々の事から思ひ懸けないこんな姿になつたから暇を頂きたいと言ふかと思ふと、忽ち戸口から飛び出した。アヤ



ヤと言つて主人は犬戀しさに其あとを追うて行くと、遠野の里の物見山に來て其處に一つの沼を作つて入つて主となつた。松之助は其態を見届けてからすごとすごと故郷に還つたが、それからは又元の貧乏な暮しになつた。

(一)若手縣岩手郡の今の沼宮内町、但し斯う云ふ沼が今でもあるか如何か。

(二)同縣閉伊郡遠野町の後にある山、頂上に青麻權現の祠があるを謂ひ、其邊に沼があつたが今は水枯れて谷池になつてゐるさうです。此沼については別譚の遠野物語に載せてある口碑もありますが、同じ遠野郷でこのやうな二種の口碑が同じ一の沼にあるのも珍らしいと思つた。

## 五 番 蛇 聾

或る農夫が畔に草刈つて居ると、蛇が蛙を呑みかゝつてゐた。農夫は蛙不愠と思つて、自分の持つて來た焼餅を遣るから、其蛙を助けてくれと蛇に言つて、蕎麥焼餅を投げて遣ると、蛇は蛙を放して穴に入つて行つた。農夫は蛙を拾ひ上げて二度

と彼のやうな奴に見付けられぬやうにしると言ひ含めて小川に放して遣つた。

其農夫に一人娘があつて、既に妙齡トシゴロになつて良い聾を尋ねてゐる場合であつた。すると或日何處からか立派な若者が遣つて來て、私は此家の聾になりたと言つた娘は其若者と夫婦になつて既に懷妊した。所が或る一人の穢い跛の老婆が訪ねて來て言ふには、私は先年お前さんに助けられた蛙であるが、お前の一人娘の一大事のことです。實は彼若者は人間では無くて先年の蛇である。彼蛇であれば先年この私を呑むべえとしたのに邪魔立てをしたお前を思ひ怨んで、其仇に娘の生命を取るべとしてゐる。娘の産はなかなか難産でただの遣方ではほんとうに生命にかゝはるから、ハギリハギリの中に水を一杯に汲み込んでそれに灰アライを入れて灰水アライを立て、其上に箕スノコ子を敷き渡して、其上で生ませれば生んだ子は死ぬが娘の生命は助かる。それから彼若者には娘が産氣づいたら、鴻の鳥の卵を食べたいと言つて山に遣れ。さうさへすれば彼奴の生命も盡きてしまふ。それより外に娘の生命を助ける術



が無いと言つて、還る時には老婆は本性を現はして跛の古蛙になつて、びくたりしやくたりと歸つて行つた。

間もなく娘は産氣づいて、鴻の鳥の卵を食べたいから山に往つて取つて来てくれと若者に頼んだ。否とも言はれぬから若者は山に行つた。高い木の梢に其鳥の巢があつた。若者は本性を現はして蛇の姿となつて其木に這ひ登ると、親鳥は巢に待ち構へて居て蛇の頭を突き碎いてたゞ一目に殺してしまつた。そして娘の生んだ子は無数の小蛇であつたが、これも灰氣の爲に悉く死んでしまひ、娘は無難であつた。

(一)大きな平たい桶様の器物、奥州では桶の大きなのはコガと謂ひ、コガの平たいものをハギリと謂ふ。

此ハギリの上に箕を敷いて産ませる事は、河童の子を産ませる時にもしたと謂ふ。

ついでにコガの方は酒桶とは言はずに、酒コガ、味噌コガ等謂ふ。

## 六番 木佛長者

貧乏な男があつて長者に奉公をして居た。其長者に立派な黄金佛ワウゴンボトケがあるので、下男は己も一生のうちに一度は彼のやうな立派な佛像を拜み度いものだと日夜思つてゐた。けれども下男奉公をする程の身分では其事も空な願ひであつた。下男は或日山に木を伐りに行つて偶然に丁度佛像の恰好をした木のぼっくひを見付けて持ち還つた。而して其れを己れの寢室に安置して日に三度の食事の時は己れの膳部を持つて行つて供へ、拜み禮拜ラッパイしてゐた。さう謂ふことを此男は永年の間行ひ續けて居たので、主人始め皆が可笑がつて居た。

長者は此下男が正直で良く働くことを承知して居て、こんな良い下男を他に放して遣るのが惜しいことだ。ごうかして永く己れの家に置き度いものだと思つて、種々なことを考へた。そして偶然に思ひついたのは彼の木のぼっくひの事であつた。



之はよいことに考へついたら、早速下男を呼んで、さてさて家來お前が日頃信心してゐる彼の木佛と己の黄金佛とに相撲を取らせて見ぬか、若しもお前の木像が己の負けたならお前は一生己れの所に奉公せよ。其代り若しも己の黄金佛の方が負けんなら、己の身代を悉皆お前に遣るが如何ぢやと言つた。そして數多くの下男下婢共を集めて立會に立て、其事の誓ひを立てた。さう言はれて下男は色を變へて己が寢間へ入つて、己の木像殿大變な事になつたぞ。旦那は云々の難題を己に吹ッ掛ける。これには己は逆も叶はない程にお前を背負つて今直ぐに此處を遁げ出すからさう思つてくれと掻き口説くと、木のぼっくひの像が言ふには、これ騒ぐな、必ず大事無い、心配は入らぬ、己は彼の黄金佛と勝負して見よう、放つて置けと云つた旦那が彼方からさあさあ早くそれを此處に持ち出したと呼ぶので、下男も仕方なく其木のぼっくひを廣間に持ち出した。主人も己れの黄金佛を廣間に持ち出した。多くの下男下婢も廣間に出てづらり立會つた。そこで長者は二つの像に斯く々々の譯

でお前達に相撲を取らせるに依つてさう心得ろと言つて、さつと團扇を切つた。すると不思議にも二つの像はぐらぐらと動き出して、だんだんと近寄り體を絡み合はせ、押しつ押しされつ、挑み挑まれ稍二時フタトキにも涉つて相撲を取り結んで居た。諸人はただあらあらと不思議がり、遂には此勝負如何にと各々聲々張り上げて木のぼっくひ負けるな負けるなと下男下婢共が呼べば、主人も血眼になつて金佛負けるな金佛負けるなと呼んだ。其中に之はごうしたとか、金佛は體總體から汗をたらたらと流し初め動きも鈍くなり彼方にぐらぐら此方にぐらぐらと揺めき出すと、主人も額に玉の汗をかき顔面紅くなつて、金佛負けるな、今迄我屋に崇め置いて類の無い程大事にして來た黄金佛ぢやないか、そんなただの木のぼっくひに負けてごうする、負けるな負けるなと、言立秘密イタテヒミツまでも罵つて怒るけれども、さう言へば言ふ程既に金佛は弱り込み遂々泣きわめくやうな聲を立てつつ倒れ伏してしまひ、再び起き上ることも出来なかつた。すると木佛は黄金佛を外へ押し出し、己れは今迄黄金佛が



居つた佛間の壇に行つて上り居据つて如何な動かばこそ、世にも不思議なことである。諸人は諸共其處に伏し拜んだ。そして金佛をば種々の雑言を交へて悪口し、前の誓ひの通りに責め立てられて、長者主人は、すごすご其黄金佛を拾ひ上げて抱いたまゝ、己れの家を追ひ出されてしまつた。そして其木佛持ちの下男が長者主人と成り代つた。

今では先きの長者主人は其金佛を抱いて諸處方々と旅を致してゐた。その中に小使ひにも困つて遂には乞食となつた。そして或る廣い野原に行き暮れた其時に、つくづく己れの斯のやうに變り果てたありさまを思つて、悲しくなつて、金佛金佛どうしてあんな木のぼくひなごに負けたか、お前の意氣地無しのをに己れまでも共々こんな憂恥を洒して艱難辛苦をなめ盡すぞと泣き口説くと、金佛は言ふことには、旦那さん今更嘆くまいぞ、あれは木佛だけれども朝夕毎日々々三度の御供へにも預り其上強い信心を籠められて居る動かぬ物、この己れはごうだ、年にほんの二

三度縁日や忌日にはかり上げられる供へ物で、どうして強い力が出ようぞ、それに形ばかりの信心は尙更己れの力を落したものだ。諸共嘆き交す。主人も今更返す言葉もなく、いつまでも其金佛を背負て一生乞食暮しをした。

## 七 番 菌 の 化 物

無頼者ゴロツキクラシが生計に困つて町へ行つて多くの假面を買つて、それを諸處に賣り廻つて居た。或る村に入つた時に日が暮れて、路傍の家に立ち寄つて宿を乞ふと、己れの家では混雜して居て申譯がないが、隣家は大家だが空家になつてゐるから行つて泊まれ、其代り食事などは近いに依つて此方から世話して上げてても宜しいと言ふので假面賣りは其空屋に入つて泊つた。其家に上つて見ると丁度諸道具が悉皆整つてあるから、男は喜んで爐の側ににじり寄つて其日の賣上げを調べようと思つて、假面



をすらしとあたりと並べて視て居た。すると座敷の方からミシリミシリと恐しい足音をさせて来る物があると思ふと、がらりと仕切の戸を押し開けて、やい其處に人間居るかど大きな聲で言ふものがあつた。賣人も驚いてひよいと振り返つて見るとこれは又一間間一杯に塞がるやうな大きな面の物が此方をじつと差し覗いて居た。そこでごろつきは咄嗟の考へで其處にあつた假面を取つて顔に當て、やアと言つて向き直ると、向ふの物はあはははと物凄く笑つた。男は又別の面を取つて素早く顔に當て、向ひ、それを幾度も繰り返すと、向ふの物が笑ひを止めて、一體お前は何かと言つた。男は己れは化物だが、さう言ふお前は何物だと言ふと、向ふは己れも化物だと言つた。男はさうかお前も化物か然しお前は大きな面ばかりしてそれだけの化物かと言ふと、化物はあゝ己は此れだけだが其代り幾何も大きな面になれるのだと言つた。男はそれでは變化が無くて面白くない、化物と云ふ物は幾何も顔を變化させるのが本當なのだ。己を見たかと言ふと、化物は見た見た思ひの外お前は上

手だと言つた。これしきの業で感心されては此方が迷惑する。まだまだ己れには取つて置きの化け方があるに依つてこれから二人で暇潰しに一つ化け較らべをやらうか、まづまづ此處に来て火にでもあたれと言ふと、化物は己は火の側に寄ると工合が悪いから行かれぬと言つた。男はからからと笑つて、でも柄に似合はぬ臆病な化物だなア、全體それでもお前は元よりの化物かと言ふと、化物は否己は實は深山の奥の澤に何年となく立つた胡桃の樹が自然に枯れて、それから朽ちて、其幹に生えた茸さ、茸で生えて幾年も幾年も其樹の幹で成長して、かなり大きな箕の程になつたぞ、すると或る日綺麗な鳥が木の枝に飛んで来て美しい聲で鳴いて居るので、初めはそれをただ美しい物だと言ふばかり思つて見て居たが、仕舞ひには己はそれを喰ひたくなつて、食ひたい食ひたい、あゝ食ひたいなあと思ひ思ひ、ちつと其鳥を見詰めて居るうちに己の體に自然と眼が出来、口が出来て、ひよいと其鳥を吸ひ込んで食つたぞ、その甘いこと甘いこと、それからは思ふやうに生物が食へるやうにな



つて、永年さうして食つて居たが、其中に胡桃の樹がすつかり腐つて折れたので、己れは幹を放れて滑り摺り歩いて居る中に、手足が出来てのこのこ歩けるやうになる。斯うなればもはや真物の立派な怪物ぢやないか。そこで深山ミヤマにはかり居るよりはと思つて此里邊に下りて來たが、何處にも體を隠す所が無いから此家の根太の下に潜んで居つて、鼠や蛇蛙などを食つてゐたぞ。其中に奥の間のおとしを開け得て其處から奥座敷に上つて何年となく居たのさ、とそれが言つた。男は、ははあそれでは此家の人達を殺して食ふのもお前の仕業かと言ふと、否々それは違ふ。己れだけ年中じめ／＼した暗い奥座敷にばかりゐるのも辛氣で偶には摺り出て來て相手欲しさに聲かければ人々は不思議に死ぬ。その屍をば食ふが己れは殺さぬぞと言つた。さうか其れで何も彼にも解つた、先づ先づ此處に來て火に當たれ、夜明まで話をしようと言ふと、否々先刻言つた通り己れは茸だから火氣と鹽氣が體に毒だ。それに當たるこ此身が溶けて流れてしまふ。其邊の板は永年使つたので鹽氣が滲み込

んでゐる。此處から先きには己れは出られぬぞ。それに今夜は更けたから己れは還る。又明日の夜出て話すべ。お前も毎夜此處に來て呉れると言つて、化物は又ミシリミシリと大きな足音をさせて奥座敷の方へ引返して行つた。

其翌朝となつて、隣家の人達は昨晚の客人はどうなつたかと思つて空家に行つて見ると、其男は今飯時最中でゐた。皆は驚いて昨夜何事もなかつたかと訊くと、無い所ではない大變な事があつたから、お前達と相談して退治すべと思つて居たと言つて、村人を多勢かり集めて、大釜で二つも三つもすます（味噌の澄汁）を煮させたり、鹽水を煮させたり、それを多くのはぎり（大きな平桶）に入れさせて、そして幾つも幾つもの柄杓を立てさせ、親類一族を前に立て、村人をあとに續かせて家中を隈なく探させたが、昨夜の化物が何處にも居ませぬ。一同は呆れて座敷の真中に寄集つて相談して居ると、何處からか、ぐうぐうと大きな甕をかく音が聞えて來る。これは怪しいぞと彼方アチラ此方コチラを見廻ると奥座敷の床柱に寄り立つて、大きな箕が



あつて、それがさう云ふ餌をかいて居る。皆の衆はそれと目配ばせをして、てんで澄汁や鹽水を其箕にぶっかけるご、もがもがと大きくなつて、座敷一杯に廣がつた。見ればそれはたまげた大きな菌キノコであつた。其菌が人を吸ひ付けようと彼方にぬらぬら、此方にぬらぬら、ぬらつき廻るけれども、みんなに鹽水をぶっかけられるので、たうとう弱り、ぐたりとなつて死んでしまつた。それをみんなが綱引きにかけて引き出し、村の道交ミチツガひに晒し置いて見せ物と致した。そして其面賣イシツり男は人々に薦すすめられて其家の身代を守り、長者となつた。

## 八番 人 買 船

或所に貧乏な家があつて、九つになる娘を他國に連れて往つて賣つて、其身代金で當分は僅クラシに生計を立てゝ居た。だが其賣られた娘の方では毎日々々親々が戀しく

て泣いてばかり居た。それを見かねた主人がもう二つ三つ齡をとつたら來てかせぐべし、そんなに親達が戀しかつたら暇をやるから當分郷里に還るがよいと言つて暇を呉れた。そこで小娘は戀しい郷里に遙々しい旅立ちをした。そして日數重ねて或る港の町に辿り著き、もう一日で己れの里へ著ける所になつたので其處の旅籠屋に泊つた。ところが其宿屋に人買船の主が泊り込んで居て、主人に佳い娘は無いかと云へば、主人は有るが少し稚いがどうだと言つた。船主は稚くともよい幾つ位かと云ふと、主人は九つか十位の所であらう、若し御望みとあらば襖の隙から覗いて見るがいと云つた。それを次の室で聽いて居た娘は、何事かこれは吾が身のことではあるまいかと佗しく恐しがつてゐた。さうすると何物かわが室を差し覗く氣配がしてそれから言ふには、あゝよい娘ぢや、幾何程かと言つた。それに主人は答へて金七十兩に負けて置かうと言へば、船主は否應なしに其値段を承知してひごく喜んで居た。



その翌朝となつて宿屋の主人が小娘に言ふには、丁度よかつた。お前の郷里の方へ行く船があるので、それに頼んでお前を乗せて遣らうと思ふから、乗るがよい。何も怖いことは無い、俺も同船すると言つた。娘はただ泣いて居たが、主人に引立てられて渚に下り立ち愈見知らぬ船に乗せられると、船の中には既に昨夜の男が乗つて居て、娘等が乗るか乗らぬにおいそれと大急ぎで船を渚から離して、浪を押し切つて忽ち沖へと乗り出した。さうして三人が波に揺られ揺られして往くうちに、其日の夕暮時或る無人の島に船が近寄つた。島に船が近寄ると船主は太い綱を手に取つて真先きに陸に跳り上つてそれを木に結付けようとするのを、船に居た宿屋の主人はいきなり腰から脇差を引き抜いてぶつりと其綱を切り断つてしまつた。すると船は勢ひ弾んでさうと沖の方へ出た。それを見て船主の男は、やあやあと叫んだが、宿屋の主人は聞えぬ振りして櫓權を取つてづんづんと沖の方へ漕ぎ返した。島に置き去りを喰つた人買男はあらゆる悪體を吐きながら叫んでも、もうどうするこ

とも出来なかつた。そしてたうとう宿屋の主人は娘を連れて元の港に漕ぎ還つて、船に數多くある金銭や織物絹綾などを取り集めて其娘に與へ、郷里の父母の許まで無事に送り届けた。

九番 蜘蛛 女

或る小間物賣りが路に迷つて山奥に踏入つて行つた。はてこれは困つた。何處かに宿るやうな所はあるまいかと思つて歩き廻つてゐると、谷合によい案配に古寺があつた。小間物賣りは丁度幸ひと思つて、内に入つて、永い事火を焚いたことの無いらしい爐に薪を採つて来てくべてあたつて居た。其中に夜がだんだんと更けた。すると二階から人の足音がして何人だか下りて来る氣配がして、やがて合ひの襖をさらりと開けて、魂消るやうに美しい女が三味線を持つて入つて來た。そして客來



様し三味線でもひいて聴かせ申しますべかと言つて、持ち直して、ザンコザンコと弾きはだけた。するとどうしたことか不思議にも小間物賣りの首筋に絲がかゝつて首がきりきりと引締められた。これではならぬと思つて其男は箱から小刀を出して首に絡まり着く絲をカリ、と切り放した。さうすると女はまた、これこれ客來様、まつと三味を弾いて聴かせ申しますべかと言つて、三味を持ち直して、ザンコザンコと鳴らし掻きはだけた。すると又男の首に絲がきりきり絡着いてきつと引締めた。そこで男は小刀で其絲をカリ、と切り放した。そんな事何回も何回も續いて遂に夜半になつた。しまひに男は思ひきつて小刀で其女を刺した。女はあれし客來様は何をめさんすと言つて、荒々しく二階に駆け上つて往つた。

男は早く夜が明ければよいと思つて居る中に、やつと夜が明けたから、彼の女子が何物だらう、生きて居るべか死んで居るべかと思つて二階に上つて見ると、何も居なかつた。ハテ不思議だなアと思つて方々を探すと、隅の方に大きな笹株のやう

な物がうんうんと唸つて居た。よく見るとそれが大きな古蜘蛛であつた。そだから(そこで)改めてすつかりと斬殺した。

大正十二年一月卅日。谷江婆様の夫、治三郎爺が話。爺は爐傍でムシロを織りながら、婆様の話が途切れると、こんな話をちよいちよいとして呉れた。

## 一〇番 蜘蛛の青入道

或る腕利きの狩人が奥山に行つて泊つて居ると、眞暗な夜に、大きな青入道が、狩人殿が来て居たかと言つて來た。狩人は黙つて居ると、青入道が、ちえちえ餘り退屈だから、技倆較べをすべえと言つた。そんたら先づそんだ(汝)から化けて見ると狩人は言ふと、青入道は何に化けべえと言つた。狩人はお前が出来るだけべアコ(小さく)なつて見せろ、うんとべアコになつて見せろと言ふと、よしきたと言つて



青入道はだんだん小さくなつた。そしてこれでもか、これでもかと言ふから、狩人はまだまだと、いつまでも言うて居る中に、段々小さくなつて極く極く小さな蟲ムシのやうなふうになつた。そこで狩人はいきなり捉へてホクチ箱の中に入れてビンと蓋をした。翌朝朝日の押開きに開けて見ると中に蜘蛛が死んで居た。

(一)ホクチ、クマノホクチ、火繩銃に入れる火薬の燃料。ガマ草の穂から採る綿だと聞いた。それを入れる重に眞鍮の小さい箱。今でも山里の農夫共はマツチを入れる箱に代用してゐる。

此話は、私が谷江婆様の許に、話を聴きに行つて居るさ謂ふことを聞傳へて寄つて來た村の話好きの青年古屋敷庄治の話。治三郎爺が話の蜘蛛の怪から聯想して語つたものである。

## 一番 蟹の報恩

或る長者の下婢が、毎日々々米の磨汁を門戸カドの澤蟹にやつて居た。蟹の方でも慣れて、下婢の行くのを待つて居て出て來た。そんなことを何年となく續けて居た。

其折りに其女のもとに何處ともなく一人の美男が毎夜通うて來た。お前は何處の何と云ふ者だと訊いても、男は返辭をせず寝て、夜明になると歸つて行くのであつた。それに毎夜のことではあるが家の中に何處から入るのか戸を開ける音がしなかつた。またいつも肌かひごく冷たかつた。女は氣味わるくなつて、よくよく氣をつけて居ると、其男は根太場ネタバ(床下)から通うて來ることが分つた。女は翌朝になつてから、主人に、私の身の周圍アハリに此頃不思議なことはかりありますから、どうぞ七日七夜の暇ヒマをくなくさい。これから觀音様に行つてお籠コモりを致したいからと言つた。主人も案じて暇をくれたから、女は觀音堂に行つて、七日七夜の祈願をかけて、どうぞ觀音様もし彼の男の眞ホントの素性を明アカして下さいと拜んだ。

七日七夜の夜半に、御堂の扉をざんざんと叩いて、此處開けろ、此處開けろと呼ぶ聲がした。女は戸の隙から覗いて見ると、其男は大蛇となつて來て、御堂をぎりぎり巻き締めながら、尻尾で扉を打ち叩いて居た。中で女は息の根を殺して、



黙つて一生懸命に観音様を拜んで居ると、外の大蛇はいよいよ強く扉を叩いて、開ける開ける、開けなかつたらこの御堂を締め壊こわしてしまふぞ。開ける開けると、いよいよ強くぎりぎり巻き締めた。御堂はみしみしと碎ける音がした。女は生きた心地もなくて専念に観音様を拜んで居ると、其時外では俄にのしのと何物かが闘つて居る氣配がした。それが稍久しく續いてゐたが其中に音が静まつた。其中にしらしらと夜明けになつた。

夜が明けたから主人は、下婢を案じて、これこれ男ども、あれはどうなつて居るか観音堂に早く行つて見ろと言つた。下男どもは観音堂に行つて見ると、大蛇が御堂をぐるぐる巻いて居たので、皆逃げ還つて、旦那様々々大變だ。観音堂が大蛇に巻かれてゐると告げた。主人も驚いて村の人達を呼び集めて多勢で行つて見るといかにも大蛇は御堂を巻いて居たが、少しも動かなかつた。遠くから石や木を投げつけて見ても動かなかつたから、みんなが段々側に近寄つて行つて見ると蛇は死んで居た。それがたゞ死んで居るのではなくて、澤蟹さわがいどもに鱗の隙間々々に無數に入られて、肉に噛み込まれて死んで居た。澤蟹も死んで居た。そして娘は無事で御堂の中に居た。

村の人達は其大蛇と澤蟹の塚を作つて供養した。此話はなんでも南の濱にあつたことだと謂うておらは聞かせられた。

此譚で南ノ濱と謂ふのは、南の方氣仙濱ほどの意味である。話者はそんな觀念であつた。又其處に来て居た古屋敷庄治の話は少し内容が變つて居るから左に摘要する。

或る長者殿の娘があつて、毎日椀を洗ひに前の小川に行つてした。其川に一疋の蟹がゐて、娘の流した椀から落ちた米粒を拾つて食つて大きくなつて居た。或年の人身御供に娘は取られることになつて、娘は白木の箱に入れられて、多勢の村人に送られて奥山の古沼のほとりに持ち運ばれた。そして村人は逃げて歸つた。夜半頃になると、箱の隙間から血なまぐさい風がさつと娘の鼻に吹いて来る。娘は生きた心が無くて居た。するま何物だか光り輝いて来て、箱に乗りかゝりて足を踏掛けてめりめりと打ち壊して、中の娘を食はうとした。其時何處からか大蟹が飛んで来て化物の首に噛みついて、鬨つて二つ共に斃れた。化物は蛇であつた。娘は蟹のおかげで助かつた。(二月三十一日の分)



## 一二番 雌 鶏 婆

或る所に夫婦が暮して居たが、いくら働いても貧困であるから、男は世を果無んで一層のこと狼にでも喰はれて死んで仕舞つた方がいゝと思つて奥山の狼の居る所に行つた。そして狼の巢のある巖穴を見付けて、其穴の前に突つ伏して居ると、穴から大きな親狼が出て来て、お前はごうしてこんな所に来て寝て居るのだと言つた。男は己れはいくら働いても貧乏して困るから、一層のこと狼殿に喰はれて死んで仕舞ふべと思つて此所に来て斯うして居る程に、ごうか早く喰つて呉れろと言ふと、狼はつくづくと男の顔を見てゐたが、否々お前ばかりは喰はれぬ。何故なればお前は眞の人間であれば勿體ない。それだのにお前が貧乏すると言ふのはお前の働きの甲斐無い故ぢや無くて、女房の悪い爲ぢや。くやむな、己れは良い法をお前に授け

て遣る。此毛筋を翳して人間を見ろ、さすればお前の心にも成程と合點が行く。實はお前の女房は人間ぢや無くて古雌鶏だ。だから三升の穀物があれば其三升、五升の物だと其五升のものを食ひ搔ッ散らすのだ。必ず必ず女房に未練を持つなど言はれて、そして狼から狼の眉毛を一本抜いて貰つて、其れを持つて夫は家に還つた。男は家に還つて何氣無い風をして、狼の眉毛を翳して女房を見ると、これはしたり、全く紛れも無い大古雌鶏であつた。驚いてこれでは仕舞ひには己れまでも喰はれべと思つて、俄に空怖ろしくなつて其儘男は家を遁げ出した。そして當所も無く町のある方へ往つて、町の入口の升形の傍に立つて、狼の眉毛を翳して出入りの人々を見てゐると、之れは又今迄人間とばかり思つて居た物が總て體は人間でも、首から上はさうで無くて犬があつたり、猫や鶏や鼠や鳥や、それから怖しい山の狼だの狐だの鹿だの、總てそんな畜生の類であつた。男は今更乍らに眞人間の無いのに驚き呆れて居ると、其日もすつと遅くやがて夕暮時になつた頃、麻布を背負つた一



人の身成の餘り良く無い女房が通りかゝつた。その人ばかりは首から上も眞實の人間であつた。男は數多の中からやつと眞人間の形の人を見付けたので、限り無く懐かしく思つて、遂に吾知らずに其女房の後からついて往つた。すると女房は山奥の一軒家に入つたで、男も門を入つて行つた。そして己れは路を迷うて來た者だからどうか一夜の宿を頼みますと言ふと、先刻の女房は快くそれをきいて、それはそれは御安い御用であります。さあさあ早く上つて憩みなされてと言つて、家に上げて、それからいろいろな御馳走をしたり眞に丁寧にして呉れた。

男は其家に泊つてゐたが、何日になつたとて何處へ行くと言ふ當も無いので、女房に頼んで焚木採りでもよいから、此家に置いて使つて呉れと言ふと、女房も承知して、其儘其處の下男となつて居た。だが、不思議なことには此家には主の女房だけであとは人一人居なかつた。これには何か譯が有ることだらうと思つてゐると、或時女房は此家には極く極く大事な物がありますから、座敷なども開けて見てはな

らぬと言つた。男はいよいよ不思議に思つて居た。

或る時女房は己れは今日は町へ往つて來るから留守を頼む。併し座敷だけは必ず見て呉れてはならぬと念に念を押して堅く言ひ置いて出て行つた。あとにたつた一人残つた男は、自分の外に誰も人間が居ないので、女房があれ程見るなど言つた座敷が見たくなつて、誰も見て居る者が無いから知れる氣遣がないと度胸をきめて、ほんの少し隙見をしようと思つて襖をそつと少々開けて見た。するとそこが廣い座敷で眞中に一本の大きな梅の木が咲き香つて、その前枝に何か小鳥の美しい巢があつた。男は今では前の用心も忘れて、珍らしいから座敷に入り込んで、其小鳥の巢をのぞいて見ると其れは鶯鳥の巢で、中に綺麗な卵が七つあつた。餘り美しいから男は何氣なく取つて見ようと思つて一つ手にとると、その拍子に取つばづらかして床に落した。すると卵が碎けて其中から一羽の小鳥が出て、ホホケチヨと啼いて飛んで行つた。あとの六個の卵も皆同様に取つばづらかしてしまふと小鳥となつてさ



う啼きながら飛んでしまつた。男は呆氣に取られてそれから次ぎの座敷を覗いて見た。

次の座敷を見ると、此處も廣い座敷で真中に大きな樹木があつてそれが座敷一杯に廣がつて大枝小枝が差し、枝毎に大判小判の黄金がたらづいてなつて居た。男は其金を欲しいと思つて、大木に登つて、一つ取らうとすると、手から取ッぱづらかして下にちやがんと落した。すると黄金が、見るなの座敷を見られたがやい、口惜しいちやほいと言つて飛んでしまつた。そこで男はこれはしまつた。ほんに己れは見るなの座敷を見てしまつた。これは早く此處を出た方がよいと思つて、襖をびちびちとめて出て、何にも知らぬ顔して居た。

其處に女房が還つて來たが、顔色を變へて、これこれお前は私があれ程見るなど言つた座敷を見たな、この座敷を人に見られたら、もう此家にも私は住居は出來ぬほごに、お前にも手間錢やるから何處へか行つて呉れと言つて、男に金五十兩呉れ

た。そして己れは、此の里戀しごほい、此の里戀しごほホホケチヨと泣いて、鶯鳥となつて何處へか飛んで行つた。男はそれに驚いて伸び上り伸び上つて鳥の行末見べえと思つて、あたりの景色を眺めるとわれは野中の藪の中に金をつかんで寢て居たつた。

村の米爺は此譚を二つに分けて話して居た。尤も雌鷄婆の譚の方は知らなかつたが、後段の鶯女の方は或男が山に萱蒨りに行くと見知らぬ館があつて、と謂ふやうに話してゐた。たゞ此處には婆様が話した通りに記録して置く。

### 一三番 鷄 長 者

或る家で、孫共を幾人も持つが、産むと母親のふところから失つてしまふと謂ふ不思議なことがあつた。或る日旅の六部が來て宿を乞ふから泊めると、六部の言ふ



にはこれ程の大家で子供が一人も居ないと云ふことが珍らしい、これには何か訣があることかと言つた。そこで家人はそれは斯う云ふ訣で生れると直ぐ失ふので言ふと、六部はさても不思議な話を聴くものだと言つて其夜は寝た。ところが丁度其夜嫁子がお産をして男の孫を生んだと言つて、俄に上に下に騒ぎ喜んだ。併し其喜びの下から復悲しんでゐた。其有様を窺ひながら六部は一人此方の座敷にまづまづとしてゐた。

夜更けになると、臺所でごんごんと火が燃え上るのに、はて今頃怪しいと思つて六部はそつと起き上つて隙間から見ると、一人の悪相の老婆が立膝ごときで五升焚きの鍋をかけて、水をざあざあ入れて煮え立て、それから何時の間にか嫁の産んだ赤兒を持つて来て其熱湯に入れて煮て、皿に盛つてむしやむしやと喰ひ出した。そしてあらかた食つた。それを見た六部は耐りかねて爐邊まで飛び出で、老婆をぎゅつと取りおさへ首を上から締めつけて、お前は何故人の兒を喰ふかと言つて堅く首

を取締めると、老婆は不意を食つて藻掻き、其譯を聴きたければ言ふから、此手を少しゆるめて呉れろと言つた。そんなら手をゆるめるから早く話せと言ふと、老婆はされば己れは斯うして赤兒を食ふには譯がある。その譯と云ふは己れは此家に三代傳つた古雌鶏フルトリであるぞ、己れも孫子を育て度いと思つてこれまで幾何多くの卵を生んだか知れないが、三代傳はるうち此家では己れの子を一度も育てたことがない。自分の孫子を育てられなかつたら何と云ふ情無いものだと言ふ己れはよくよく残念に思つて、それで己れは斯うしてこれまでも此家の孫子を多く食つたぞ。此後も多く食ふぞと言つた。さうしてあとは古雌鶏と化つてばさばさと羽叩きして飛上つた。

翌朝になると、家では昨夜産んだ赤兒がまた失せたと言つて、人々は泣き騒いだ。六部は静かに起き出で皆さまさう泣き騒いでも今は詮無い。それには斯う云ふ譯があると言つて、いかにも此家に古雌鶏が居るかと言ふと、家人はいかにも此家には赤かしいフルシドリの古雌鶏があると言つた。これからは其鶏の子を大事に育てさせろ、さう



したらやがて此家の孫子も大事なく成人するだらうと言つて、六部は其家を立ち去つた。

それからは此家では其雌鶏を極く大事にして一つも卵をとらないで、育てさせ、千羽になるまで育てさせようと思つて育てさせて、やがて九百九十九羽目になると其中から一羽の孔雀鳥が出て、其家は鶏ノ長者と呼ばれる家柄になつた。

#### 一四番 淫 娘

或所に美しい娘があつた。年頃になつたから、よい鹽梅の若者を婿に取つた。それを聞いて村の若者共はひどく怒つた。(彼の娘が俺以外の夫を持たぬ筈だと言ふ男が多く出て、)そして其等の若者共は皆寄り集つて相談をして、婚禮の夜に葬禮の仕度をして、棺箱を擔いで其家に行つた。

主人はそれを見て痛く嘆いた。やがて式が済んで今度は村の若者達の祝儀の席となつた時、若者達は擔いで來た棺を床の間に飾立て、葬式の道具一切を其前に並べ立て、線香を焚き、御燈明を上げて、一勢に鉦を叩きながら念佛を唱へ始めた。其時主人は座敷の眞中に出で、新婿を呼び、これこれ婿殿、お前を一旦我が不束娘の夫に迎へたが、御覽の通りの席故何卒お前の妻を俺に借して呉れと言つて、娘を膝元に引寄せて首を斬り落し、屍を棺の中に納めて、いやいや(これこれ)村方のお人達、斯く棺箱にも物を入れたからには早速持ち還つて呉れろと言つた。村人は今は逃げるにも逃げられず躊躇して居ると、婿は吾が新妻を死なしたのは村人の爲だ。敵を討つと言つて刀を抜いたが、これは眞に止められた。だが村人は遂に娘の屍を押しつけられて棺を擔いですすごと立ち去つた。

其れから主人は直ぐに婿に他家から嫁を取つて世繼とした。

大正十二年一月二十一日蒐集の分。



## 一五番 娘の骸骨

或る齷齪手間賃を取つて其日暮しをして居る爺があつた。今日は四月八日だから家でゆるゆる休まふと思つて居ると、急に用を頼まれた。爺はゆつくり飲まふと思つて買った一升の酒もゆるゆる家では飲まれなくなつたので、徳利をさげて用先きに出かけた。其途中廣い野原ノチカに差しかゝつた。天氣も好し疲れもしたので此邊で一杯やらうと思つて、いゝ鹽梅の石を見つけて腰をかけて、盃を持ち直すと、直ぐ足もとに一つの骸骨シヤレコウベが倒れかゝつて居た。爺はそれを見て、これはこれは如何なる人の骸骨だか知らぬが、丁度よい。己は一人で酒を飲んで甘くは無い。お前も一杯やりなされ、そしてこれ斯様に咲き揃うて居る野山の美しい花見と一緒にやるべと言つて、其骸骨にも酒をそゝぎかけ、自分も飲み、これでよいこれでよい、あゝ面

白いと言つて、唄などを歌つて、其處を立ち去つて行つた。

用を達して歸路に其野中を通つたのは既に黄昏時であつた。少しでも薄明るい中に家に歸り着きたいものだと思つて急ぎ足で歩いて來ると、背後から爺様一寸待つて下されと呼ぶ聲がした。何人だと振返つて見れば、直ぐ身近くに十七八の美しい娘が立つて居た。其娘はあの今日は爺の御蔭で眞實嬉しかつた、お前に其返禮をしたいので實は此處に斯うして待つて居ましたと言つた。爺はこれは狐だな。狐に魅される時とはこんな時だ、油断ならぬと思ひつゝ、姉様お前は何だと言ふと、娘の曰く、爺よく聽いて呉れ、私は三年前の丁度今頃、野方に出ると此處で急病で死んでしまつた、其後兩親は私の體を探せども、機縁薄き爲に今日まで見付けられないで私は此處で暮して居た。そして此月の二十八日は丁度私の三年忌に當り法事がある故、お前は何用をおいても此處に來て呉れと言つた。爺は益々狐だと疑つたが、今此場合にそんなことを荒立てゝも仕方が無いからいゝ加減にあしらつて其處を立



ち去らうと思つた。すると娘は、爺は何か疑心を挟んで居るやうだが、とにかく二十八日の朝には必ず此野中に私を迎へに来てお呉れと言つた。應諾と約束して其夕方は別れた。

爺は半信半疑で、それでもともかく二十八日となつたから野中に來て見ると、もう遙か向ふから娘の姿が見えて居た。娘は爺よ待つて居たと言ふ。そして娘に連れられて行くに、程無く隣村に出で、大きな構への家に着いた。其家には村人が多勢寄り集つて居る。爺は俺はとも入れぬと言ふと、娘はそれなら妾の著物の裾に取り附いて入れと言ふから、爺は娘の著物の裾に取り附、と難なくするすると何人も見付けられずに家の中に入つた。そして佛壇の間に座らせられた。其中に御吸物が出て酒が供へられると、娘はそれを爺に食アガれ食れとすすめた。爺は好きなものだから酒を飲んだ。本膳が据ゑられると爺はそれをも皆食べた。満座の僧侶や親族共に佛の前の供膳の物が何時の間にか無くなるので、これは不思議なこともあるもの

だと言ひ合つた。やがてお膳を下げる段になつて、一人の下婢が誤つて皿を落して缺いた。主人はそれは大事の皿であつたのにとひどく小言を言つた。それを聞いた娘はあのやうな騒ぎを見るのが厭だから行くと言ふ。爺もそれでは俺も行くと言ふと、よいから爺は此所に居て呉れと言つて止めて置いて、娘ばかり何處かへ立ち去つた。

娘が立ち去ると同時に、爺の姿が衆人に見えて來た。爺はみんなに座敷の真中に連れ出された。そしてお前はごう云ふ譯で此座敷に來て居たか其譯を話せと言はれて、今は隠すことも出來ずこれまでの一部始終を一切残らず話した。主人夫婦や親族一同の者が驚いて、其娘はどうなつたと言ふと、先刻の皿の騒ぎで娘は此所を立ち去つたと言つた。それでは其娘の屍の在る野中に案内してくださいと頼む拜むと言はれて爺は先きに立ち、それに和尚兩親親類がついて彼の野中に往つて娘の骨を見つけて還つた。そして再び葬禮を行つて娘の魂を慰めた。爺も厭な齷齪手間賃取



りなどは止めて、其家から慈悲ナサケをかけられて一生安樂に暮した。

五六

一六番 倒 娘

或る旅人が或村に來ると、未だ時刻の早い夕方であるのに家々では盡く外戸を締めてひつそりと静まり返つて居る。はて不思議な所もあるものだと思つて通つたが其中にどうとう暗くなつたので村端の家に入つて一夜の宿を乞うて泊つた。

其夜半になると、其家の戶外に何物だか來て、ごんごん戸板を叩いたりがりがり爪で搔きはだけたりして、ごうか此戸を開けて呉れえと言ひ嘆く者がある。旅人は此夜中に何者であらうと戸の節穴から覗いて見ると、それは實に恐しい大きな双角をさゝえた小丈の化物である。旅人は驚いてお前は何物であるか、何でそんな風をして人の家に時刻でもない時に來てそんなに騒ぐのか、よもやこれには譯無いこと

ではあるまい。話して見ろ、事に依つたら俺は此戸を開けるばかりかお前の力になつてやらないこともないと言ふと、外の化物はいよいよ泣き悲しんで、旅の御人よくも言うて下された、實は私は此家の繼娘です。それが此家の中に今寢て居る繼母のために味噌桶ヨガに倒さに生埋めにされて果無い最後を遂げたが、今が今までも私の屍モガウが倒さになつた儘で居るので、是れ此様な姿になり兩脚を上にして立ち歩くによつて未だに佛の道にも浮ばれない。斯う言ふ私の亡靈は其後繼母を憎む餘り既に魔性の質に立ち返つて居るから、此兩戸位は譯無く蹴破つて入ることは出来るのだけれども、ごうも此戸や柱にはられてある神佛の御守札が邪魔になつてそれも叶はぬ。御情ちや程に旅の御仁ごうぞ此戸を少々開けて下されと言つていよいよ泣き嘆く。旅人は譯を聽くと可哀想でもあるので、それでは少し戸を開けてやるから中に入つてお前の繼母によく頼み、屍を味噌桶から取り上げて順序に墓場に葬つて貰へ、人に害をせぬ約束を爲さば内に入れてやると言つて兩戸に少し隙を作つてやると、化



物は其所をがらりと押し開けて中に飛び込み、繼母の咽喉笛に噛みついて殺してしまつた。

それを見て旅人は、これ化物汝は間違ひはせぬかと言ふと、ごうかこればかりは見通して下されたい、繼母は私を殺したばかりでなく重々の悪業を積んで居るから仕方がない。お客様にはまことにお氣の毒ではあるが、お蔭様で三年此方の妄念を晴したが、此上は私の屍を味噌桶から取り出して順序に墓場に埋めて呉れと頼む。旅人は化物に案内されて裏の方に行つて見ると、いかにも味噌桶に倒さまに埋められた娘の屍があつたから、それを取り上げて村人と語らつて墓場に厚く葬つてやつた。それ以來兩脚を頭の上に戴いた化物が村に出なくなつた。

此話には類話があつて、私は老媪の家で凡そ三種程聞いた。今は一寸かんたんな筋だけれども、老媪から聞いたものを録した。

一七番 鰻 婆

或所に酒飲みがあつて、町から酔つて歸つて途中の路傍に寝て居た。すると眞夜中に、誰だか、すんすむんすと話をする聲に目を覺ますと、其聲がこんなことを言ふのであつた。やア山ノ神殿か、あゝさう言ふのは箒神殿であつたか。今此下村の某メシの女房のお産があつて行つて來た。生れた子は男の子であるが、三つになる七月の七日の日に水の物に捕られる運を持つて來たのでむぞや、(可愛想)だと言つた。それまではよく聽えたが二人の神々が話しながら向ふに行つたので、其後はよく分らなかつた。酔ヨクたくれは今山ノ神様だと謂ふもの言うた某と謂ふのが自分なのであるし、女房が懷妊して今日か明日かの産なので、もしやと思つて大急ぎで家に歸つた。すると家では今しがたお産があつて男の子が生れたと言つて騒いで居た。男は子供が三歳になつてからは窃かに心配をして居た。いよいよ三歳になる年の



七月の七日日ナノカビヒの日指ヒヂシの日が来たので、

六〇

其日は子供を庭に出して、柱にしつかりと縄で繋ぎ着けて、其傍で父親は鎌をこしこしと磨いて居た。けれどもさつぱり何の事もなかつた。ところが其日の夕方に何處からか一人の婆様が来て、あやあや何してこんなめい、子を柱などに繋いで居るのし、もぞや、(不憫)な、俺が解いてやるべえと言つて、柱の縄をいちくつたが、其婆様は何故か縄の結び目を解けなかつた。父親はこれにてツきり怪しい婆だと睨んで、今まで研いで居た鋭鎌で婆を斬つた。婆はアヤ此人は何をしようと叫んで、前の小川に這入つて死んだが、それは大きな鰻であつた。子供の難がこれでのがれた。

前話と同じ、古屋敷庄治君の話である。尙同君の話に左の断片の物もあつた。

或る樵夫が深山に行つて大樹の下に泊つて居るに、夜半に山ノ神と箒神とが来ての話に、今此下村でお産をさせて来たが、隣家同志に男の子と女の子が同時に生れた。そして男の子の持運は竹一本だし、女の子は一日に鹽一升だと言ふ。それが自分の家のこまらしいので翌朝急いで山を下りて歸つて見ると如何にも樵夫の家には男の子が生れて居たし、隣家には女の子が生れて居た。そして男の子の方は初め

は富貴であつたが段々貧乏になつて桶屋になつて世間を流浪した。女の子の方は初めは貧しかつたが末には長者になつて親孝行して暮して居た。そこに男の子の桶屋が廻り合せて長者の女主に頼まれて桶を結うて一生暮した。

其貧乏であつた女の子の富貴になつた譯は、裏の畑の大根を抜いた跡から酒が湧き出て、泉の酒で盡きなかつたから酒屋長者となつたのである。

又男が桶を結うて居て咽喉がかわいたから、裏の島に行つて大根を抜いて食ふべと思つて、大根を抜いたらアンと佳い酒の香がして水がこんこんと湧いて出た。汲んで飲んで見たら甘酒であつたから男の子はひどく驚いた……(此分二月一日聴話。)

## 一八番 骸骨の仇討

上七兵衛と下七兵衛といふ仲のよい朋輩共があつた。二人は相談して他國に手問賃取りに出た。下七兵衛はよく働いて金をうんと貯めたが、上七兵衛はならず者の



仲間に入つて、悪い事ばかりして居た。其中に三年の月日も経つて下七兵衛が故郷に歸らうと言ふ時、上七兵衛にも歸らぬかと言ふと、歸り度いが著る著物一枚持たぬと言ふ。そこで下七兵衛は村を出る時に一緒に出たものだから此男一人後に残して置いては歸られぬと思つて、著物から旅費までも仕度して與へて共々旅の空を立つた。ところが上七兵衛は故郷に入る國境の時、下七兵衛を斬殺して金を奪ひ、知らぬふりをして家に歸つた。そして下七兵衛は村に居る時とは違つて旅に出たところ悪い事ばかりして家に歸る費用も無くて歸つて來ない村人を囁著して居た。其中に復々博奕を打つて悪錢を皆失ひ、上七兵衛は村に居つかれなくなつて再び旅に出た。そして以前に下七兵衛を殺した時まで來ると、何處かで七兵衛々々と呼ぶ聲がする。はて誰だらうと思つて後を振返つて見ても人も居らぬ。これは空耳かと思つて歩き出すと又呼ばれる。はてこれは不思議なこともあるものだと思つて、よくよく氣をつけて見ると其聲は路傍の藪蔭からするのであつた。

上七兵衛は不思議に思つて其藪蔭に立寄つて覗いて見ると、人間一人前の骸骨があつて白齒をむき出してげらげらと笑つて居た。七兵衛は驚くと、骸骨は朋輩衆久し振りだな。お前は俺を忘れたか、或は三年以前に此處でお前に斬り殺されて骨身を碎いて貯めた金までも奪ひ取られた下七兵衛のなれの果であるぞ。いつかお前に廻り逢ふ時もあるかと思つて、それからは毎日々々此處で待つて居たが、その願が達して今日は計らずもお前の顔を見ることが出來て、これ位嬉しいことはないと言ふ。上七兵衛は愈々驚いて其場を逃げ出さうとすると、骸骨はしつかりと其裾を骨ばかりの手で取りおさへて離さず、お前はこれから何處へ行くのかと言ふ。七兵衛は仕方なく俺もあれから村に居たが金も無くなつたから又これから旅に稼ぎに出かけようと思つて實はやうやつと出て來たのだ。少しも早く行き度いから其處を離せと言ふと、骸骨はさうかそれは相變らずお前も困つたものだ。それではどうだ、俺はお前のために踊りを踊つてやるが、俺を連れて行かぬか、俺はたゞ箱の中に入



れられて行きさへすれば、別段何も食はぬし著ぬからこれ位資本モトデの入らぬ金儲けは外にあるまいせ。だがお前はさう言ふ俺の踊はごんなものかと疑ふかも知れないから今此處で其型をひとつ踊つてみせよう、そらよく見て居れと言つて、カラカラカラと骨を觸れ合せて鳴らしながら手を振り足を上げて種々なしぐさの踊を踊つて見せた。そして是れ七兵衛、先づつとこんなもんだが、此上お前が唄を歌つたり拍子をとつたりして呉れたらごんなものでも踊つて見せるせ。どうだよい金儲けぢやないかと言つた。成程この鹽梅ではよい金儲けぢやと思つて上七兵衛は骸骨の言ふ通りにして、それを持つて旅に出た。

その骸骨踊は町々村々でひどく評判をとつた。遂にお城の殿様にきこえて、上七兵衛は殿様の御殿に呼ばれた。そしてお城の大廣間で骸骨踊をさせることになつた。ところが骸骨は殿様の前では一向踊らなかつた。上七兵衛は青くなり赤くなり種々な唄をうたひ拍子をとる囃し立てたけれども、骸骨は少しも動かばこそ、上七兵衛

は怒つて鞭で打つと、骸骨はむックとばかり起き上つて、殿様の前にひれ伏して、唯今殿様の前で踊を踊らぬ譯を言ひ、こんな踊を踊つたのも皆私が殿様に御目にかゝり度い爲にばかりにやつたこと、實は此男はこれこれのことで私を或る峠で殺して金を奪ひ取つたと逐一訴へた。殿様は驚いて、これは世にも不思議な訴へ事である。それ皆の者共此男に早く繩を打てと言つて直ちに座を立たせられた。あとで上七兵衛は役人共に詮議されて罪が分りはりつけにされた。

大正十一年二月一日開話。

### 一九番 歌ひ骸骨

浪人侍があつた。國々を廻つて居ると或る山中で一つの骸骨を拾ひ上げた。其骸骨を拾ふにはひどく難儀をして拾つたのだが、斯うしたのも、自分が浪人のことな



ればいつ此骸骨のやうに、知らぬ他國の山野に骨身を晒すやうな事もあるまいものでもないと思つて、世の無常を感じたからであつた。そして時々暗い所から明るみに出しては拜んでゐた。或時いつものやうに風呂敷包の中から取り出して拜むと、骸骨は物を言ひ出した。己はお前にいつもさうして拜まれて居るので、何とかして御禮をしたく思ふが、此身のことなれば別段の事も叶はぬ、たゞ物を言ひ唄などを歌ふことならば出来るから、これから廣い國に出て己のことをふれ(評判)歩け。そしてたら己は淨瑠璃でも語るべえと言ふ。それから侍は廣い國へ出て行つて、人集りの場所に行つて、骸骨に淨瑠璃を語らせてうんと金を儲けた。ところが段々と侍は骸骨に疎くなる。金がたまるに従つて骸骨より生きた人間の方がよくなる。

さうして居るうちに其事が殿様の御耳に入つてお城に呼ばれた。骸骨は物を言はぬ。殿様は此者は偽り者だと言つて、打首にされやうとする。其時突然骸骨は口を開いて、

男と謂ふ者は急くもんでねえッ

と言ふ。そして侍は助けられて其殿様に召しかゝへられて立身した。

## 二〇番 熊井勇軒

薩摩様の領分に大きな檜山があつて其境界は知れなかつた。殿様は其境界を見極めたいと思つて國中の狩人テダキを詮議して最も腕の秀れた者を一人選ぶことにした。そこで熊井勇軒といふ狩人が選ばれて、それに豪傑の家來が二人ついて三人で殿様の城下を出立した。豪傑共の兩親はいくら殿様の御命令だと言つても餘り山奥深く踏み入るな、生命あつての物種だ、よい加減にして家に歸れと言つた。たゞ勇軒の親ばかりは殿様の御命令だ、たとへごんな事があつても生命のあらん限り檜山の境界を踏み極めない中は再び歸つてはならぬと言ひ聞かした。とにかく三人はさうして



見果てもつかぬ檜山に踏みこんで行つた。三人は檜山に分け入つてから空を見ぬこと殆んど一ヶ月ばかり、あらゆる艱難辛苦をして方々彷徨ひ歩いたけれどもまだまだ暗い山中で、其境界が何處だとも當がつかなくつた。そこで二人の豪傑は、とても此有様では何日まで歩いたつて境界を見極めることが出来さうもないから戻らうと言つて、後に引返してしまつた。

けれども熊井勇軒ばかりは父親の言葉もあることなれば、あとに一人残つて猶も山の奥へと入つて行つた。もはや二ヶ月も山中を彷徨ひ歩いたから、持參の食物も既に盡きて、残つたものは僅かの焼鹽ばかりとなつた。それを大切にして日毎々々に鳥や獸を捕つては其鹽で味をつけて食べた。さうして尙三十日がほどの日を重ね、丁度山に入つてから九十日目になつた時に、やつと密林が疎らになつて、木々の梢の間から初めて日輪の影を仰ぎ見た。折しも其時は夕方であつたから、兎に角今日は此處に泊つて、明日こそはすつかり此山の境界を踏み極めようと思つて、焼鹽を

舐めて居た。夜明けになつたから大空の星を眺めて居ると、がうがうと山が鳴り渡る。何事だらうと思つて思ふと其邊が明るくなつて、何だか光物がチャラチャラと金鳴りをさして空を飛んで通つた。勇軒はよしと思つて鐵砲で狙ひをつけてごんと打つと、彈丸は誤たずに命中して其光物が地上に落ちて來た。はやく夜が明ければよいと思つて居るうちに、白々と夜明となつたから、其光物の落ちた邊を探すと、それは一羽の山鳥であつて、體全體の羽毛は盡く黄金となつて居る。勇軒は其の羽毛を毫つて見るとたゞの毛が一本もない。盡く皆黄金である。肉をば焼いて食つて残りの肉は持つて其處を立ち、愈々今日こそは此山の境界を見極めようと思つて尙も向ふに進んで行つた。晴々とした所に九十日目に出たことであるから、空の色も珍しく四方を眺めて居ると、遙か向ふの岩の上に腰をかけて煙草をのんで居る人影がある。勇軒はそれを見ると聲を立て、叫ばんばかりに嬉しくて、其人目がけて急いで行つた。それは一人の老翁で手には大きな斧を持つて居た。



勇軒は腰を屈めて翁に物を御尋ね申し度いと言ふと、翁はひごく驚いて、いやいやお前は何處の國から來た御人だか、俺は此齡になるまでお前のやうな御人をまだ見たことがない。してお前はごういふ御用でこれから何處へ行かれるのかと言つた。勇軒は俺は薩摩の國の殿様の御命令で御領分である此檜山の境界を見極めに來た者であるが、さう言ふ翁こそ何人であつて、抑も此處は何と謂ふ所であるか知らして貰ひ度いと言ふと、翁はさうか世に表薩摩といふ國があるといふことは豫ねがね祖父祖母の話で聞いてゐた。御仁は其國から來られたのであるのか、私は此流れの裾の郷、裏薩摩といふ所から此處へ獵に來て居る者である。家には妻子もなく、年は九十一歳である。此山には年古りたる山鳥が多く棲んで居ること故それを捕つて其日々々の食事として居る。昨夜も古山鳥を一羽磔をもつて打つたが、それは何處へ行つて落ちたか行末が知れぬと言つた。勇軒は昨夜打つた黄金の羽毛の古山鳥はそれであつたか、これは其の肉であると言つて、焼鹽をつけた肉を翁にやつた。翁は

それを喜んで食つた。勇軒は尙も言葉を重ねて、其裏薩摩といふ國はごういふ郷かと問ふと、翁は其郷には別に王様と言ふ者もない。又別段怖しいと言ふこともないが、たゞ困ることには一日に一人宛の人身御供を、國司の生神様に捧げなければならぬ。それだけが禍であるが、それも三年目にならなければ吾が郷に廻つて來ぬから餘程廣い國だらうと思はれる。其外には病氣といふこともないが、一日に一人の人身御供で人間の別段に殖えるやうなこともないと言つた。勇軒は其の話を聽いて不思議なこともあるものだと思つたが、兎に角俺も長い旅をしてひごく體が勞れて居るから、翁の家に連れて行つて休まして呉れぬかと言ふと、翁は快く承諾して、我が村へと連れて行つた。そして我が家は貧乏で仕方ないが、大屋は大きな家であるからと言つて、勇軒を大屋の家に連れて行つて譯を話して泊めた。大屋始め村人は思ひがけぬ珍客に喜ぶこと限りなかつた。

勇軒は大屋の家に滞在して居たが、二三日經つと其家の門を多くの村人が泣きわ



めきながら出入りする。たうとう村人の泣聲で其家は埋まつた。餘り不思議さに堪へかねて主人に訊くと、主人の言ふには私は女の子を一人持つて居るが、十八になる一人娘のお初と言ふのが今度此國の生神様の人身御供になるので、村人はあゝして夜晝娘のところに暇乞ひに来て呉れるのであると言ふ。勇軒は驚き且つ憐れになつて、然らば其人身御供になる日はいつであるかと聞くと、明日の宵の事に差し迫つてゐる。若し其人身御供をしなかつたら村は一夜の中に荒されると主人は云つた。勇軒はそれなら明晩其場所に娘お初殿と一緒に俺をやつて呉れと言ふと、主人は否神様の事にそんなことはならぬと言ふ。勇軒は否さうではない、己が國とて如何なる神々も在せども、人の娘を人身御供などに取る様な邪神魔物は更でない。これには何か深い譯があることであらう、決して此家や村人には迷惑はかけぬに依つて是が非でも人身御供の場所に俺をやつて呉れ。その成行を見届けて、それが眞の神様ならば俺も其儘お前の許に立ち還つて様子を委しく話して聽かすに依つて是非俺を

やつて呉れと言ふ。主人も勇軒の赤心にいたく動かされて、それではともかくと言つて、其事を村人に謀ると、村人は擧つて御頼み申すと泣いて頼み禮をいふ。そこで愈、明日の宵には娘お初と勇軒とは人身御供の場所に行くことになつた。

次の日になつて、勇軒は様子如何にと見ると、娘お初は白木の棺に入れられて、多勢の村人に擔がれて行くので、勇軒も鐵砲を持つて後からついて行つた。行くところなく村境の所となつて其處に大きな松樹があり、其下の平たい大石のある所まで行くところ大石の上に棺を置いて、御主人様只今人身御供を持つて参りましたと言つて村人は皆一勢に其處に平伏した。そしてござやと其處を立ち去らうとするから、勇軒は暫時待つて呉れと呼び止めて、これこれ村の人達、今夜此處で鐵砲の音がたゞの一度だけ鳴つたならば明朝此處に来て見て呉れぬともよい。たゞし若しも二度三度の鳴る音がしたら、明日の夜明には再び此處に来て見て呉れと言つた。村人は其語を聞いて互に別れの言葉を言ひ交しつゝ、一目散に村の方へ行つてしまつた。



勇軒は村人の立ち去るのを見送つてから静かにお初の棺の側に歩み寄つて、棺板に口を押しつけて、中のお初に云ふことには、これ／＼お初殿、決して氣を落してはならぬ。今宵こそはお前を取らうとする邪神魔物を退治してお前を助け出してやる、それも今暫時の辛抱だから心丈夫に待つて居れ。俺は怪神の現はれるまでは此邊の物蔭に身を潜めて居ると言つた。棺の中のお初はたゞ微かに、はいごうぞお頼み申しますと言つて泣くばかりで、あとの言葉は何を言ふのか分らなかつた。勇軒もお初に力をつけて置いて、自分は其石から五六間程隔つた所の大きな橡の木の下に隠れて怪物の現れるのを今や遅しと待つて居た。眞夜中頃になると血醒いヌク温いやうな風がさアさアと吹いて来る。勇軒は今だと思つて待つて居ると、ざあざあと山を鳴らして来る物があるから其方ソツチを見れば、びかびかと光る物が飛んで来る。近づくのを見ると、光る物は其眼で、ざあざあと山鳴りがするのは髪を背後ウシロに引く音であつた。さう言ふ物が二人来て、一人はお初の入つた棺の周圍をぐるりぐるり三

度廻つてから、棺に口を押し當て、お初居るかと言ふ。中のお初は微かにはいと答へると其物は後に退いて元來た山の方へ引返して行つた。また一人の怪物は其大石の周圍をぐるりと廻ると石の上の棺に口を押しつけて、お初居るかと言ふ。中のお初はたゞ微かにはいと答へると、これも三度同じやうなことをしてから前の怪物と同様元來た山の方へ引返して行つた。それから又暫時経つと以前よりも恐しい山鳴りがして、四邊が眞晝のやうに明るく光りが差したから見ると、其光が兩眼の光りであつて、向ふの山の峰を渡つて丈が七尺ばかり、髪を後ウシロに三間も引摺つた怪物が來た。そして其大石の側まで來ると、前の物と同じく石の周圍を廻り、お初居るかと言ふ其聲は嵐が松枝に吹き當るやうな音である。お初は二度目までは微かな返辭をしたが、三度目にはもう微かな聲もせぬ。すると怪物は棺を自分の頭の上に擡げて立ちあがつた。其時まで待ちに待ち、忍耐に忍耐をして居た勇軒は、此時ぞと思つて、怪物の後頭ウシロアタマを一發ゴンと打つた。すると怪物は棺を其處に投げ出して、さ



つと四邊に黒風を吹かせつゝ、勇軒目がけて襲ひかゝつて來たが、勇軒の二發目の彈丸のために前額を射貫かれてゴツと其處に打ち倒れた。勇軒は木蔭から跳り出て怪物の胸に止めの彈丸を打ち込むと、さすがの魔神も息を引取つた。

怪物を射止めた勇軒は、棺の中からお初を出して口に藥をふくませて介抱をして居た。其處へ村人はやつて來て皆して口々にお初の名を呼ぶと、お初はやつと息を吹き返した。夜が白々と明けたので死んだ怪物をよく見ると、それは年を経た猿の經立である。村人はそれと見て、あゝ憎い々々此奴の爲にこれまで何程の可愛い娘や嫁を奪はれたことか、斯うして呉れると口々に言ひ罵りつゝ、鉈や斧で屍をすたすたと斬り碎いてしまつた。其時勇軒は村人に言ふには、まだ此怪物の外に二個家來のやうな怪物があるらしい。其二個は慥かに彼れに見える山の峯を越えて行つたが何人か其棲家のやうな所を知る者はないかと言ふと、彼の山鳥捕りの老翁は前に進み出て、俺とても碌々分らぬけれども十七歳の時、父親に伴はれて彼の峰越えて狩

に行つたことがあつたが、其時父親の言ふには此國の御主人様の御住居は、あれあれ向ふ遙かに見える彼の黒山の宛であること教へられたことがあると話した。勇軒はそれは老翁の話す通りに相違あるまい。俺はこれより其處に行つて彼の者共を打ち殺して此國の禍の根を絶やさなければならぬ。申譯ないが御老人何卒御案内を頼むと言ふ。そこで村の人達は斯うなつては貴方達二人だけはやらぬ、何の物の役には立たぬながらも吾等にも弓矢斧鎌といふものもあることである、どうかお伴させて呉れと後からぞろ／＼とついて來る。山國の生立ちのことなれば女共まで食事の物などを持つて後に續いた。さうして谷を渡り彼の山の峯を越えて行くうちに、山に續くに更に山があり、谷澤に續くに尙深い澤があり、其奥に又非常に深い澤がある。其處の尾根に大きな白い岩が立つて見えた。翁は彼の白い岩のある澤に其棲家があると聞いて居ると言ふ。勇軒は村人を引連れて其白岩のある澤に下つて行つて見ると、澤の中合頃に大きな岩穴があつて、其邊に多くの人間の骸骨が累々と積



み重ねてあつた。それを見て勇軒は村人に皆一勢に叫べと言ふ。村人が大きな聲を出してやあやあと叫ぶと、岩穴から前夜の二個の怪物は出て来て、己れ共生命の程を知らぬかと村人の方に跳りかゝらうとした。すると勇軒は村人の前に立ち鐵砲を突き出して、汝等の大將も此鐵砲で打ち殺した。お前達の生命も取つてやるから覺悟せよと叫んだ。昨夜から大將が歸つて來ぬのに不審を抱いて居た怪物共は、大將が殺されたと聽いて、勇軒の前にひれ伏して、吾々の生命ばかりは助けて下され、もとより我々はこれまでも一人も人間を取つて食つたことはなく、たゞ親分の食ひ残しの骨をしやぶらせられる位が精々であつた。昨夜もたゞ人身御供を見届けに使ひに遣られたゞけであると言つて泣いて生命乞ひをした。併し勇軒は馬鹿を言へ、お前達だつて大將の食ひ残しの人間の骨をしやぶつたぢやないか、生かしては置けぬと言つて二個の怪物の首を斬り落した。其れからまだ怪物は居らぬかと勇軒は岩穴に入つて見たが穴が暗くて廣いばかりで何物も居なかつた。そこで怪物の首二個

を村人に擔がせて村に歸つた。

怪物を退治して大屋の家に立ち歸つた勇軒は、生命の親だと言つて娘お初に言ひ寄られた。其上にお初の兩親や村人から懇願されてお初を妻にした。それから村人と語らつて彼の檜山を切り開いて路をつけ、妻のお初や村人の主なる者共を引き具して表薩摩の國に歸還した。そして殿様に檜山の境界を見極め、裏薩摩の郷を見付けたことを言上すると、殿様はひごく勇軒の手柄を褒められて、多くの黄金を與へ尙其上に見付けた裏薩摩の郷を與へて其郷の領主にした。勇軒はそれを有難く頂戴して、兩親始め一族や、連れて來た妻のお初や村人等を引連れてまた裏薩摩の郷に還つて生涯は申すに及ばず孫子の世までも榮えた。



## 二一番 三眼一本脚の化物

種戸峠タクト(陸中國遠野郷より大槌濱オホツチハマへ越える濱街道)といふ山路に三つ眼二枚齒一本脚の大入道が居て通る人々を驚かした。夕方になると誰一人其處を通れる者はなかつた。或時一人の盲人が何事も知らず此時に通るかかると大入道が林の中から跳り出て路の真中に踏跨り、鐘を割るやうな聲を出して、これこれ俺は三眼ミツメナクに一本脚の入道だぞ怖しく無いかと、ぐわつと三眼で睨みつけた。だが盲人には其形相が頓と見えぬから一向平氣なもので、やあほざくな何處の悪戯者だ其處退け、俺こそ三本脚ミナクナシに眼無と謂ふ天下の座頭の坊様だ。邪魔するな邪魔するなと怒鳴つたので、本當の化物の方は怖れて山深く退散した。

此話の分は老媪の夫治三郎といふ老人の話。爐邊で筵を織りつゝ、老媪の話の途絶々々の合間にこんな話を聴かして呉れた。大正十二年二月一日。

## 二二番 天狗の小扇

或所に博奕打があつた。博奕に打ち負かされて、ぶらぶら還つたが根が剽輕者だから、途中で或る神の宮に入つて懐中フトコロからさいころを出して、はて斯んな鹽梅で負けたべかなアと思つて其れを轉がしながら見て居た。其事を堂の傍の杉の木から天狗が窺つて居て、これは不思議なことを遣つて居る人間が居る。あれあんなに獨りで笑つて居る。何か餘程面白いことに違ひ無いと、するする下枝まで下りて来て一心に見て居た。なにしろ大様な天狗がへまなそんな藝當をやるのだから、小ばしツこい人間に氣付かれずに居る筈がない。ははア今天狗の奴が俺の遊事を見て不思議がつて居るのだなアと横目で見ながら、此は一つかついで遣るべえと思つて、さいころを振つて、はアお江戸が見える。それア京が見える大阪が見えるのと出鱈目を



並べて獨り興がる素振りを見せて居た。天狗はいよいよ不審で堪らずたうとう木から下りて堂に来て、これこれ人間、お前は何をして居ると聲をかけた。博奕打はびつくりしたやうに顔を上げて、これはこれは天狗様でありましたか、私は只今京大阪から江戸あたりを見物して居たので御座りますと言ひとぼけた。すると天狗はほうお前はごうして此處から京大阪や江戸邊を見物して居るのかと、びつくりして訊いた。博奕打は根ツから、からかふ氣で、天狗様もしたことが何を言ひなさる。これ此通り此さいころと謂ふものを轉がせば、今言うた京大阪や江戸邊は愚かなこと、轉がしやうでは唐天竺邊まで樂に見物出來んすと言へば、天狗は其さいころと謂ふものを欲しくなつて堪らず、赤顔を尙一層色濃く塗つてそれでは一寸俺に貸して見ろと言つた。博奕打は矢庭にさいころをふどころに押隠して、とツぽでもねえこと、寶物を天狗様になごお見せすることが出來ますべえ。あなた様が俺の寶物を手に持つたが最後雲を霞と飛んで行かれてしまつたら後に残つた俺が足摺りして泣

いたとて追ツつきますか。あゝ眞平々々どわざと身顛をして見せた。それを聞くこと天狗はひごくもごかしがつて、そだから人間と謂ふものは疑深くてごも困る。何しに俺がお前ら如きの持物なごただで盗み去るものか、それではごも仕方がない、此俺の寶の赤い小扇と取替へべえぢやないか如何だ。これ／＼此扇はな斯うして扇げば何でも思ふ事が叶ふ。又俺のやうに何處へでも飛ぶべえと思へば飛べる。お前は此處から京大阪を見物すると謂ふが、それだとして其京大阪へ飛んで往けなかべえ。その飛ぶと謂ふことは此扇の表一通りのことさ、萬事思ふ儘に何事でも此處で扇ぎ出すと謂ふ寶物だ。さあお前のさいころと取替ツことをやるか。博奕打は内心これはしめたと思つたが、上面は眉を顰めて稍暫らく考へて見る振りをしてから、そんなら此さいころと取替へて見てもよいと言つた。天狗は喜んで、こんな氣變りの早さうな男の側に長居は無用のこととばかりに、自分の小扇をば其處に置いて、博奕打のやくざなさいころを引つ摺んで、それこそ雲を霞と何處へか飛んで往んでしまつ



た。

八四

博奕打は喜ぶまいことか早速其小扇であふいで江戸へ飛んだ。そして或る立派な家の前に行くに、美しい娘が表に出て往來を見て居たから、物蔭に廻つて其娘の鼻がおがれおがれと扇いで、ひごく鼻を長く伸ばしてやつた。其長者の家では驚いて修験を呼んだり、さあ醫者よ法者よと大騒ぎをして呼びかけて見たが、どうしても愛娘の鼻が短くならない。そこで表に立札をして、何處の誰でも此家の一人娘の鼻の伸びたのを直した者があつたら、千兩箱一個遣ると書いた。其事を待つて居た博奕打は直ぐに行つて、赤い小扇を使つて娘の鼻を元通りに短く直して、首尾能く千兩箱を貰つた。

博奕打は又扇を使つて京へ飛んで行つた。そして或る立派なお公卿様の家に行つて雪隠に入つて隠れて居ると、其家のお姫様が入つて來たから美しいお尻を赤い小扇で撫でた。するとお尻は忽ち左のやうに鳴りました

ひびし、とびし、とんげえず

あいはうちのうちわは……

……すてべのとんがらやい！

魂消たのはお公卿様で、前の家のやうに醫者よ法者よと頼んで見たが少しも鳴りがとまらなかつた。やつぱり仕方がないから表に立札を立て、何處の誰でも此館の一人姫のお尻の鳴るのを止めた者をば聲にすると書いた。千人萬人行つたが誰も直せぬ處に、其事を待つて居た博奕打が行つて、扇を使つて直ぐにお姫様の鳴る音を止めてあげて其家の聲殿となつた。そして後には大した立身出世をした。

此分老嫗の家で同時に聞いたもの、話者は村の青年古屋敷庄治といふ男、前話と同日。



## 二三番 聽 耳 頭 巾

或所に爺様があつた。氏神に稻荷様があつて、いつも生魚ナマザカナでも上げたいと思ふけれども、貧乏でそれも叶はぬから、或日御堂に行つて、氏神様申し氏神様申し俺はごとも貧乏で生魚も上げる事が出来申さないから、どうぞ此俺を食つて下さい。どうぞお願いでござりますと言つて拜むと、氏神様は爺や爺や何もそんなに心配することはいらぬ。俺もお前の難澁して居ることはよく知つて居るから、一つ爺に運を授けて遣んべ。それ此寶頭巾を遣るからこれをかぶつて見ろ。これをかぶれば鳥獸の鳴聲が何でも分ると言つて、古フルしい汚い赤い頭巾ヅキンを爺様に授けた。さうでがんすかこれはハアどうも有難うがんと言つて爺様は喜んで其赤い頭巾を貰つて、よりよらりとかい道ドク(街道と謂ふことではなく)を歩いて行くと、路傍に大きな木があつ

たから、其木の下に休んで居たがいつの間にかさうとろと眠つた。これや俺は今眠つたなど思つて居ると、濱の方から一羽の鳥が飛んで来て、疲れて其木の枝に休んだ。すると又アラミ(和賀稗貫地方)の方からも一羽の鳥が飛んで来て其木の梢にとまつた。それを見た爺様は、稻荷様から貰つた聽耳頭巾を試して見るは此時だと思つて、其赤い頭巾を頭にかぶると、俄に頭の上に不思議な話聲が聽え出した。二羽の鳥が言ふことは、やア随分久しぶりだつたが、お前は今迄何方に居て来たぞアラミの方から飛んで来た鳥が言ふと、濱から来た鳥は、俺は今迄濱の方に居たのだが、どうも濱も此頃漁がなくて不景氣で困るから此方に飛んで来たが、さう言へばお前はまた何方から飛んで来たと言ふと、相手は俺はアラミから来たが、いやはや不景氣なことは何處も變りがない。ところで此頃何か世の中に不思議なことは無いかと言ふと、相手は別に珍らしい事でもないが濱の方にはこんな事がある。或る村の長者でんで土藏を建て、から五六年になるが、土藏ホツマの方前の上に、屋根を葺く時



に何しに這ひ上つたものだが、一疋の蛇が上つて居るうちに板を打付けられて釘を打たれて動けないで居る。今は其蛇は半死半生の境に居るが、感心なことには其雌蛇が永年の間食物を運んで養つてやつてお互に本當に苦勞をして居る。其思ひが積り積つて其家の娘の體に障り病氣になつて居る。あれは今の中に土藏の屋根の板を離して蛇を助けてやらぬと、蛇も死ぬし娘も死んでしまふ。俺も再々あの屋根に飛んで行つて鳴いたけれども、人間と謂ふものはなさけないもので、少しもそれをさどらないと言ふと、相手の鳥も本當に人間と謂ふものは其事になると分らないものだと言ひ合つてから、そんだったら復此次ぎに出會ふべなど言つて、西と東に鳥どもは別れて飛んで行つた。

爺様は其鳥の話の聽いて、これはよいことを聽いた。早く其長者ごんに行つて娘も助け又蛇も助けてやりたいが、何にも仕度がなくて出掛けられない。町裏をうらうらと歩いて居ると破れた搔鉢カイバチが落ちてあつたからそれを拾つて紙を貼つてかぶり

濱の長者ごんの方へ行つた。そして長者ごんの門前で、八卦々々と呼ぶと、長者ごんでは娘の病氣を直すのに、何がよいかと心配して居た時だから、あいあい門前をふれて通る八卦屋、早く内さ上つて八卦置いてくれと言つた。そこで爺様は内に入つて、何八卦をおきますべと訊くと、實は此家の娘が永の病氣で今日か明日かと言ふやうな容體だから、なぞにしたら良くなるか其八卦を置いて見てくれと言つた。爺様はそれでは病んで居る娘の處に通してくれと言つて、娘の枕元に行つて坐つて、二十里這つたる葛クワの葉は這へば二十里、と謂ふ呪文をうんと繰返してから、其後で鳥から聽いた話を委しく話した。すると長者ごんでは如何にも八卦様の言ふ通り五六年前に土藏を建てた。それではそんな事もあつたか、では少しも早く其蛇を助け出さなくてはいけないと言つて、近所に住んで居る大工を呼んで来て方前の板を離して見ると、いかにも體が白くなつてもはや半分腐りかゝつた蛇が居たから、あゝこれのことだと言つて、大事に箆に入れて下に下して、流前の所に置いて物を遣つ



て暫時あつかつて丈夫にしてから放して遣つた。すると娘の病氣も薄紙を剝ぐやうにすんすんと治つて日數を経つうちにすつかり全快した。そこで長者ごんではひどく喜んで、爺様に金を三百兩お禮に與へた。爺様は大層な大金持ちになつて家に還つた。そして俄に氏神様の御堂を立派に建て直して、生魚も買つて来てお上げしたり、それから行つた事のないお祭りをしたりしてお禮をした。

それから爺様は今度はよい著物を買つて著て旅に出かけた。そしていつかの大木の下に行つて休んで居ると、また西東から鳥が飛んで来て其木の梢に休んでお互に世間話を初めた。一つ町にばかり居てはつまらぬと一羽の鳥が言ふ。すると一羽の鳥はほんごにさうだが、俺の今迄居た町にかう謂ふことがある。其町の長者ごんの旦那様は大病になつて今日か明日かと言ふ生命だが、それは五六年前に離れ座敷を建てた時、昔からあつた庭の楠ノ木を伐倒したが、其木の伐株が丁度離室ひなせの軒下になつてゐて雨垂れに打たれて居る。然し根が死に切らないものだから生のある限り

は芽が出て、育ちたい育ちたいと精魂を盡すのだが、芽が出れば刈取り出れば刈取られて死ぬには死なれず、さうならばと謂つて生きるにも生きられず、其思ひが旦那にかゝつて病氣になつて居る。それにまた山々の友達の樹木が毎夜のやうに楠ノ木の所に通うて来て見舞をして居るが、あれは生かさば生かすべし又どうせ枯らす氣なら根からよく掘つてしまへばよいのに困つたものと言ふ。爺様は其話を聴くと町の長者ごんの方に出掛けて行つて、八卦々々と呼ぶと、長者ごんの館の内から人が出て来て、八卦々々頼むから内に入つてくれと言つた。内に入つて見ると表で見たよりも立派な構への家である。爺様は何の八卦を置きますべと言ふと、家の人は實は此家の主人が永年の病氣で難儀をして居るが、いくら醫者法者を代へ代へ頼んでも仲々良くはならない。八卦殿何かよい考へでもあるなら何卒教へてくれと言ふ。爺様は引受ける。俺は旦那様の病氣の譯をしつかりと當て、尙其上に病氣までも直して上げるから決して心配し申すなど言つて、彼鳥の話で聴いた離れ座敷のこ



とを言ひ、此家には五六年前に建てた離れ座敷があると思ふから俺を其座敷に泊めてけろと言つた。家の人達は、あや八卦殿は何して其離れ座敷のあることを知つて居りますと言ふのを、それも八卦で當てたが、まづまづ俺を其室に置いてけろ、三日三夜の中には旦那様の病氣の根を洗ひ浚ひ明かにして見せるからと言つて、離れ座敷に爺様は入つた。そして俺が言はない中は誰も此座敷に入つてくれてはならぬと言つて、夜になれば少しも眠らずに四邊の様子をさげしんで居た。

眞夜半頃になるとがさがりと音して来るものがあつて、やい楠ノ木だか、鹽梅はごうだと謂ふ聲がした。すると何だか土の底からでもするやうな極く極く幽かな聲で、あゝさう言つてくれるのは六角牛山のナギの木か、遠い所を毎夜難儀をかけて申譯がない。何おれは此通り一刻も早く死にたいのだが、それさへ思ふやうに行かないので斯うして苦しんで居ると言ふと、何そんなに力を落すななどと慰め言を言つて別れて行く。また一時経つと、今度はしゅっしゅっと謂ふ音がして来たも

のがある。楠ノ木ごの鹽梅がなぞだと聲をかける。すると楠ノ木は以前のやうな聲で、俺はとても助らぬがお前達に斯のやうに毎夜見舞に來てもらつて申譯がない。さう言ふお前は早地峯山ハヤチホクサンの這松だかと言ふと、あゝさうだが、なんでもないことだからさう心配をするな。遂五葉山の方へ遊びに行く通り筋だから斯うやつてお前にも逢はれるが、これが東と北では逢はれない。ほんだら春にもなつて見たら又本復ホンブクにもなることがあるべから力を落さずに時節を待つて居ると言つて、這松はまた先刻來た時のやうな音をさせて行く。其事を聽耳頭巾をかぶつてすつかり聽いて居た爺様は、早く夜が明ければよいと思つて待つて居た。

明くる日、爺様は病人の座敷に案内してくれと言つて、旦那様の枕元に行つて、いつもの葛の葉の呪文を唱へてから、昨夜の樹木ごもの嘆きのことを詳しく話した。これは庭の楠ノ木ばかりの難儀ではなく、諸處方々の高山の樹木ごもまでも辛い難儀をして居るのだから早く木の根を掘つてしまへと言つた。そして其木の根を掘つ



て庭に飾つて木ノ神様に祭ると、旦那様の病氣は薄紙を剥ぐやうに安々と直つた。爺様は皆にひごくありがたがられて又金三百兩貰つて家に歸つた。そしてそれから慾を出さないで八卦を止めて、長者となつた。

## 二四番 嫁の毒害

或所にひじやうに仲の悪い嫁姑があつた。姑の病氣になつたのを幸ひに、殺してしまはふと決心して、嫁は近くの醫者に行つた。そしてお醫者様しお醫者様し私に毒藥ドクグスリをけて、がんせと言ふと、醫者はそんな物を何にすると訊いた。嫁は正直に悪い姑を毒害すべと思つてと言ふと、あゝさうかさうかそれは大きによい事だと言つて、これはひごく利く毒藥だと言つて一升樽に何だか一杯詰めてくれた。そして此毒藥は食はせると直ぐ死ぬと謂ふ物でなく自然ジネンと弱つて死ぬものだ。若しすぐ死んだら

お前も俺も落首になるのだから、よく氣をつけて親切ごかしにして姑親に一日に一度づゝ食はせろよと言つた。

嫁は喜んでそれを家に持ち歸つた。そして姑ガガな姑ガガなおれは今お醫者様さ行つて、ひごく養生になる藥を貰つて來たから、これを食アガつてがんせと言つて喰はせた。姑はいつにない嫁の優しさに喜んで、涙を流しながらそれを食つた。さうして嫁は日に一度づつ其毒藥を姑に食はせて、はて今日死ぬか明日死ぬか、どうせ死ぬのだから、うんと偽機嫌を取つて騙しを食はして生命を取つてやるべと思ひ、心にも無いお世辭を言つて、姑な姑なとひごく親切に介抱をした。さうされると姑の方では、また眞實の心だと思ふから、嫁子々々今迄俺は間違つて居ました。お前の心掛けには泣かされると言つて嫁の手をとつて拜み拜みした。嫁も毎日々々偽を言つて居るうちに、姑の眞味に動かされて人情が出て、姑を殺したくなつた。或日また醫者の所に行つて、姑を殺したくなつたから毒消しの藥を貰ひたいと言つた。醫



者はあゝさうか、實は先達お前にやつた毒藥はあれは人の體が死ぬ毒藥ではなくて、邪險な心を殺す毒藥であつたから何にもいらぬ。家に歸つて見ろ、お前の姑は病氣が直つて居るからと言つた。嫁は禮を言つて歸つて見ると、姑はお前の介抱のお蔭で、これこんなによくなつたと言つて起き出して喜んで居た。嫁も喜んでそれからも尙に大事に一生懸命に介抱したので、姑の病氣は全快した。そして世間でも褒められるやうな仲の良い姑嫁となつた。

二月一日聽話。

二五番 親 棄 譚

或所に悪い嫁嬬があつて、姑婆様が年寄つてかせげなくなつて寢て居て虱を取つて一生懸命に噛み潰すのを、あれあれ夫な、あの婆々は毎夜々々あゝして寢て居な

がら米を盗んで行つて噛んで居るから、家に置いては家業にならない程に、早く山さ連れて行つて来てけもさえと言つた。夫は何が何でも實際の生みの母親を山に棄てたくないの、これこれ嬬やい、そんではそんな事を言ふもんぢやない。俺等も年取つたらあんなになるんだが、さうなつたら如何にすでえと言ふと、女房はそだら俺出て行くとのさばるので、嬬に出て行かれては夫は困るから、ほんだらええ、俺は母親を奥山さ連れて行つて棄てゝ来るから、お前は家を出るなど言つて、母親をおぶつて、山に棄てて行くことにした。其事を傍で聞いて居た今年九つになる息子が、父々、祖母さを棄てに俺もかたつて行くと言ふから、父母は、ないささいな奥山の遠い遠い怖い所なんだから童ごは行く所でないと言つても、いゝから俺も行くと言つて泣いて仕様がなないので、嫁嬬はこれこれ其位行つて見たから行げぢやと言つた。そこで父は老母をおぶつて息子を連れて、親棄てに奥山に行つた。

行くが行くが行くと、奥山の谷に大きな平たい石がある所に行き着いた。父は背



中から老母をおろして、さあさあ母親、お前は此所で死ぬ。ほんだら俺等は歸るぢえと言ふと、老母は孫を抱いて、孫々お前は達者で大きくなれやえ。此祖母は此處で死ぬからと言つて泣くが泣くが泣いた。それを見て父はさあさ母に叱られるから早く歩べと急き立てると、子供は父待て待て、俺は此處の木や石や何も彼にもよく見て置くと言つて、なかなか其處を離れようともせず、大きな樹の數などを算へて居たが、急においおいと泣き出して其處らを轉び廻つた。父はこれお前は何してそんなに泣けやと訊くと、子供は泣く泣く、父はヂク(勇)がよいからよいが俺はヂクがないから分らない。父や母が此祖母さのやうに年取つたら、俺がまたお前達を此處さ持つて來て棄てないばならぬかと思ふと、俺悲くてわからないと言つて、おういおういと泣き叫んだ。父もそれを聞いて眞實にさうだと心で悲んだ。そして子供に責められて復老母をおぶつて家に歸つた。

嫁嬪は家で、あゝ厄介な年寄りも無くなつてこれで俺等ばかりになつたと喜んで、

老母棄ての祝事にいろいろな御馳走をこしらへて父子の歸るのを待つて居ると、其日の夕方、夫はまた婆様をおぶつて歸つて來た。嬪はこれは何故なことだべとひどく怒つた。夫は山で子供に言はれたことを言ふと、嬪も理に詰つた。そこで夫は、なア此老母に悪い手當をすると俺等も嫁や子に悪い手當をされるから、これから親切にすべやと言つた。それから嫁姑の仲もひどく睦しくなつて、親孝行と謂ふ名前をとつて過すやうになつた。

## 二六番 頓平稻荷と八幡狐

或所に頓平稻荷と八幡稻荷といふ二疋の狐が住んで居た。頓平の方には位があり、八幡の方には位がなかつたので、隣り同志で睦しく暮して居ながら、位のない方がどうしても下目になつて居た。ところが或日二疋の棲穴の近くで一人の樵夫が木を



伐つて居ると、何だか穴の中に言ひ争ひする聲が聞える。はて何だべと思つてさげ  
 いんで居ると、そんな位階アルナシの有無で、八幡狐をひごく蔑んで悪口を言つてゐるから、  
 あれは頓平の方が悪い、眞實ホントウの力量だら八幡が方にあるのだが、位が無いばかりに  
 あんな辛いヒドク目に遭ふのだ。あゝよしよし俺は戒めて遣るべと思つた。

其翌日、樵夫は烏帽子垂衣で早馬で頓平稻荷の所に行つた。そしてお前は昨日隣  
 りの八幡狐をひごい目に遭はせたのが不都合だから、位を返せと言ふと、頓平はひ  
 ごく消氣シヤウキでいろいろ申譯をしたが、樵夫は耳にもかけないで遂に頓平から位箱を取  
 返した。それから隣穴の八幡狐のもとに行つて其位箱を與へ、以來稻荷大明神を仰  
 せつけるに依つて、世上に悪い事をしてはならぬぞ。若し悪い事したら、隣穴の  
 頓平のやうに罰を加へて遣る。よくよく氣をつけて人間のためになれと言つて歸つ  
 た。

頓平は弱つたが、金があるから、金は幾何積んでもいゝからまた位を取りたいと

思つて京の伏見に上つた。すると本山では帳面を見ていくら何十年に其方に位を  
 授けてあるが、其をどうしたと言はれて、これはまた異なことを聽きます。あの  
 位は私の粗忽から取上げられて隣穴の八幡狐に遣られたのではありませんかと言ふ  
 と、本山では一向知らぬ。何お前は何處かに落したのであらうと言つた。そこで頓  
 平は八幡狐との事情を話すと、それでは如何にも其方が悪い。そんな悪狐に位など  
 を遣つて置くことはならぬと言つて追ひ歸された。さうして早馬で八幡狐のところ  
 には本當の位を遣つたものだと謂ふが、頓平狐の方はそれからたゞの野狐になつ  
 て暮した。

## 二七番 跛

## 狐

或時、或山の狐の親分が去年の冬鐵砲打に追ボツかけられて怪我をして寝て居たが、



それがよくなつて全快祝ひがあつた。彼方の洞の狐、こつちの長根の狐、山中の狐どもが各々に雉子を取る奴もあれば兎を取る奴もあつて、それ相應の土産物を持つて皆ぞろぞろと親方の處に御祝ひに行つた。

こゝに谷間の老年の跛狐があつて、やつぱり親分からお使ひを貰つたから、何か土産物を持つて行かなければならぬと思つて、毎日々々山中を歩いて見たが、雉子でも兎でも跛狐が行くうちにはずつと向ひの長根まで逃げて行くので、遂に其振舞ひの當日までに土産物を取りかねて、素手で行つた。

ところが親方の處に行つて見ると、皆からの土産物が親方の後に山のやうに積まつてあつて、中にはどうして取つたのか鹿や狸までもあり、人の家から盗んで来た鶏や猫などもあると謂ふありさま。親分から跛爺は何を土産に持つて来たなアと言はれて、赤面してもちもぢして居ると、皆が嘲笑つたり馬鹿にしたりしたあげく、遂に外に突出した。跛狐は泣きながら自分の巢に歸つた。はてはてなア俺とてもこ

んな片輪でなかつたなら、皆のやうに土産物を持つて行つて、あゝ皆と一緒にイセハバ(對等の交際)をすることが出来るのだがと思つて涙を流して居ると、穴の外を親分の所の御祝ひ歸りの狐どもが酔ぱらつて話をして通るのを聞くと、何日の幾日に此下の物持の爺様の一人娘の所に親分が聲に行くことだから俺等も行つてうんと御馳走を食つてやるべえし、それなのに此處の跛爺は其聲入りにもかたられないで可笑しい可笑しいと言つて通つた。跛狐ははて不思議な話を聞くものだ。すると此下村の彼の爺様の所だと思つた。

其翌日、跛狐は跛の爺様に化けて下村の物持ちの爺様の所に行つて、もしも爺様は居申したかと言ふと、爺様は居て近い日に一人娘のところに聲取りがあると言つて、其仕度に忙はしくして居た。そしてはてお前は見たことの無い爺様だが何處から来たと言ふから、狐の爺は、實は俺は狐だが、お前のところに來る聲殿は彼れは人間ではなくて狐の親方だと言ふと、其處の爺様ははては何してお前はそんな



事を言ふ。俺家では立派な仲人もありそれにまた聾の實家もりきとした身分の所から貰つたのだがと言つた。跛爺はそれそれそれが何にもかにも皆狐どもの悪戯だ。若し爺様が俺の話カクを偽だと思ふなら、婿入の日に門前から豆をまき散らして置いて見ろ。すると立派な衣裳を着た聾殿も仲人もオモライ様も何もかにもばえッかつして(競争して)其豆を拾つて食ふから、それが偽だら見ろ。それから座敷の四隅には大きなコガ(桶)を伏せて其中に犬を入れて置くべし、聾をば据風呂桶コガに入れて蓋をして釘着けにして見ろ、皆狐だからと言つて歸つた。

物持ちの爺様もさう言はれて見ると、氣にかゝるので物は試しに、婿入りの日に門前から玄關まで豆をまいて置いた。魂消るやうな立派な風をしてぞろぞろとやつて来た婿殿だが、豆を見るとさもない心を出して皆して其豆を拾つて食つた。そして座敷に上るとあたりをきよきよと見廻したり、爺様の家では臺所でわざと鼠の油揚げをじりじりと揚げて居るので、其ばんばん香りに堪りかねて、立派なお

客様達が代り代りに立つて臺所の方を覗き込んで鼻穴をふんかめかすので、爺様どもはははアこれは本物だとただただ呆れて居た。斯うなると碌な物も食はせたく無いから、魚の腹綿かたり出して食はせて置いて、兼て頼んで置いた近所の若者どもを出して、これこれお客様達、此處の習ひで、御祝儀には是非鉞舞マサカリマヒを見せ申さなればならぬから見せ申すべえと云つて、屈竟な五六人の若者どもが大鉞を振つて、片端から狐どもを斬り伏せた。そして婿殿はまづまづ湯に入れとて、湯桶に入れて上から蓋をして蒸殺した。馬になつて来た狐をば立子繩で堅く縛つて置いたから逃げることも出来ず、其有様を見て、狐になつて、ちやぐエンちやぐエンと鳴き叫んで居た。さうして多勢の狐どもはしつかり退治されてしまつたが、こゝにたつた一疋の瘦狐があつて、ほうほうの態で其場からのがれて、山に逃げ歸つた。

其瘦狐が、かてられないで山にたつた獨りで残つて居た彼の跛狐の所に汗を垂らして逃げて来て、今日の事を話して俺ばかり獨り助かつて逃げて来たと言ふと、跛



狐はほだから人間を騙すもんぢやないと言ふと、何俺は此仇は討つて見せると言つた。跛狐はほだつて何ナニにして仇を討てやと言ふと、瘦狐はなあに小正月の十五日の夜に、彼家の屋根に登つてゐて、タンコロリン、タンコロリンと三遍唱へて見ろ、中に居た人間が皆死んでしまふと言つた。すると跛狐はそんなことではいけない。お前が屋根に登る時ごさりと謂ふ音がするべえ、其時家の内であの爺様が禪カキを鍵カギの鼻にかぶせて置いて、キジンカヘレ、キジンカヘレと三遍唱へられたらどうする。其時はお前こそころりと死ななくてはならぬと言ふと、瘦狐は何さそんな祕事を人間が知つて居るもんか大丈夫だと言つて居た。跛狐は何しても安心が出来ないぞと言つたが、實は其翌日爺様のところに行つてそつと其事を知らせて置いた。

そんなことは夢にも知らぬ瘦狐は、小正月の晩を待つて居て、夜更けに来て、爺様の家の屋根に登つた。其音がごさりとした。それを聽いて爺様はすぐ禪カキをはづして鍵の鼻にかぶせて、キジンカヘレ、キジンカヘレと三遍唱へると、何だかごろと

ろと屋根の上から轉び落ちる音がした。翌朝起きて見ると一疋の瘦狐が雪の上に死んで居た。

此話から第三二番の話まで古屋敷庄治君の話、大正十二年二月一日の夜聴記。  
古屋敷庄治君は村の百姓で當時二十七歳程の青年であつた。

## 二八番 犬と狐の旅

或時、犬と狐と旅をした。さあ狐の高慢ちきで自慢すること、俺は千里が裏をうらない二千里先きの事をささるのだぞと言つたり、俺は人間を騙す技倆があるが、お前は其人間の小使ひだと言つたり、俺は第一神様だと言つたりした。犬は面白くなくて居た。さうして居る中に或る谷川にかゝつて、一本橋を渡ることになつた。そこで狐はこら犬お前が先きに渡れと言つた。犬はいんにや(否)神様の方が先きに



渡れ。とても勿體なくて俺はお前の先きには立てないと言つた。否さうでない斯うでない。いろいろ言ひ争つて居るうちに少々犬の權幕が變つて來たので、狐はそんならよい俺は鼻を杖について渡るからと言つて先きに立つて渡つた。犬はそのあとに續いた。そして深い川の中ごろに來た時ひどく恐しい大聲でワンと叫ぶと、狐は驚いて川にざんぷりと墮ちた。

犬はそれを見て笑つて、なんだ神様、お前は先刻千里が裏からうかゞひ、二千里先きもさると言つただけが、一寸先きもさそれぬではないかと言つて、犬はさつさと戻つた。

## 二九番 狐の報恩

爺様が町へ行くべと思つて行くに、村境の所で四五人の子供等が狐を取捕トツツカまへて

四足を縄で縛りつけてひどい折檻をして居た。爺様はそれを見て狐不憫と思つて、ざいざいアエナコ兄アエナコだち其狐を俺に賣らないか、こゝに錢が百文あるからと言ふと、子供等はひどく喜んで爺様に百文で狐を賣りつけた。爺様は狐をおぶつて行つて松山の中に入つて行つた時、これこれ狐よ今から晝日ヒルヒ中里邊ナカサトベなどに下つて來るではないぞ。またあんな子供等に見付けられると生命が危いからな。さあさあ早く家さ歸れ歸れと言つて小柴立ちの中に放してやつた。すると狐はさもさもありがたさうに涙を流して、爺様の方を振り返つて見い見い奥の方へ入つて行つた

酒を大好きな爺様は其日も町で酒を飲んで、ふらふらと松山まで歸つて來ると、今朝の狐が路傍に出てかしくまつて居て、爺様し爺様し、今朝は危い生命を助けられてありがたかつたます。其御禮を何かしたいと思ふども、こんな狐の身のことだれば何も思ふやうなことも出來ないが、此下村のお寺の和尚様が先頃コト土間の据釜を壊して味噌煮釜に不自由して居るが、おれが釜になるから、爺様はそれを持つて行



つて和尚様に賣つて錢儲けをしてくれろと言つて尻尾シツポを巻いてくるると三度廻つて、大釜に化けた。爺様は狐ならともかく斯うして折角釜になつてしまつたのだから往來に棄て、置く譯にも行くまいと思つて、お寺に背負つて行つた。そして和尚様し和尚様し釜が入らながんすかと言ふと、和尚様は欲しいと思つて居た所だから直ぐ言ひ値の金を出して買つた。おかげで爺様は思ひがけない金儲けをした。

和尚様はこれはよい釜を買つたものだ。大きさも恰好も何所もかこも本當に氣に入つたものだと言つて居た。そして此釜で今年の味噌の煮初めをしよう、近所の出入りの者を頼んで来て据ゑて、小僧どもに水汲みをさせて、それから豆を入れて、ごんごん釜の下に火を焚くと、其釜は小僧ども熱い熱いと言つて、味噌豆を持つて逃げてしまつた。皆してあれアあれアと言つたごも間に合はなかつた。

翌日爺様が裏山に行つて柴を刈つて居ると、いつかの狐が、爺様爺様今日は柴刈りしてゐるかと言つて出て來た。なんたら事だ。お前は先達の狐ぢやなかつたか、

あんな釜などになつて今頃はごんなに苦勞して居るべやいと、俺ひごく案じて居たが、よく無事で居つたと言つて爺様は喜ぶと、狐はなあにお寺で味噌煮をするつて仕度をしたから、俺は此味噌豆を爺様さ土産に持つて、すぐさま逃げて來たと言つた。

それからまた狐は、ごうも此位の事ではとても爺様から受けた御恩は返されぬから、今度はおれは馬になるから、此下の長者ごんに引いて行つて賣れ。さう言つて尻尾を巻いてくるくるツと三遍廻つて大層立派な青馬になつた。爺様は何々そんな心配は入らないと言つたけれども、もはや馬になつてしまつたものだから、仕方がないから先センの釜の時のやうに下の長者ごんに引いて行くと、長者ごんの旦那様は、あゝこれはひどくええ馬だ、ええ馬だと褒めて三百兩出して買つた。爺様は生れてから見るも聞くも初めてな大金を持つて大喜びで家に歸つた。

長者ごんでは、ああこれはええ馬買つた。丈と謂ひ技倆と謂ひ男振りも氣に入つ



た馬だと喜んで、其晩立子繩タテゴナリを外して置くと、とくに山に逃げてしまつた。

其翌日また爺様は裏山に行つて柴刈りして居ると、いつもの狐が爺様々々と言つて出て来て、昨夜長者ごんの馬舎から逃げて来たことを話した。そして何處ドコその長者ごんの嬢様カカサマがなくなつて今困つて居るから、おれを其家に連れてあべ(參れ)と言つて、いい鹽梅の年頃の女房になつた。爺様爺様町さ行つて昨日下の長者ごんから貰つた金の中から、おれに赤い前振マエフリと手拭と櫛ヘシかうがいを買つてくれと言つて、それを買つて貰つて持つて長者ごんに行つた。そしてなぞにして(如何にして)住み込んだか、それは狐のことだから分らないが、とにかく其長者ごんのおかみ様になつて、金をうんと貯めてそれをまた爺様の所に持つて還つた。そんなことで爺様は狐のお蔭でひごく長者になつた。何もかにもお前のお蔭だと言つて御堂を建てて其處に置いて養つて居たが、狐が年取つて死んでから氏神様にして祭つた。

### 三〇番 二人の博奕打

二人の博奕打があつて、二人ともいつも大負けで喰ふやうも飲むよも無かつた。それで年取の晩もある神の宮に行つて泊つたが、著て寝る物がないから、其處にあつた疊を一枚著て寝た。そして二人で元朝の朝目アサメが覺めて、おい今年は繁昌々々(半疊々々)だなと言つた。半丁々々なら丁だと言つて大喜びをしたが、其年も二人の縁起が當つたかどうか分らない。

### 三一番 雀の仇討

一羽の雀が竹籬に巢を喰つて、卵を生んで居た。ところが或日奥山の山母が来て、



雀雀卵を俺に一つくれと言つた。雀はおツかないものだから一個やると、まつとくれ、まつとくれと言つて卵を搔攫つたあげく其親雀までも捕つて喰つてしまつた。其時たつた一つの卵が籾の中に落ちてむいけた。そのうちに大きくなつたから親の仇討をしようと思つて、彼方の稻杆から稻穂を集め、此方の稻杆から稻穂を取集めて團子を作つた。そしてそれを脊負つて、米の團子の本團子々々ふれて行く向ふからころろと枋の實が轉がつて來た。雀の息子殿は何處さ行くと言ふから、米の團子の本團子を脊負つて親の仇討に行くと言ふと、枋の實はほんだら俺も助太刀をするから、其米の團子の本團子一つけろと言つた。そして其團子を貰つて附いて行つた。するとまた向ふから針がちかもき、ちかもきと歩いて來て、枋と同じやうなことを言つて、米の團子の本團子を貰つて附いて行つた。其の後から蟹と牛の糞と臼とが來て同じやうなことをして雀の息子の味方となつた。

此同勢(雀の子と枋の實と針と牛の糞と蟹と胴摺臼)が、山母の屋形に押入つて行

くと生憎山母は留守であつた。それを幸ひに各自に要所要所について居た。枋の實は火爐に、針は筵の上に、牛の糞は上戸の下に、蟹は水桶の中に、胴摺臼は洞前の桁の上に。そして山母の歸りを今や遅しと待つてゐた。

日暮方に山母は何處からか歸つて來た。そしてああ寒い寒いと言つて、爐に踏跨つてあつた。其處を(見すかして)枋の實はすごと山母の臀に弾込んだ。山母はあツ熱いちえと叫んで尻餅つくくと、筵の上に針が待つてゐてちかツと刺しつけた。あツと驚いて山母は走せて行つて水桶に入ると、中に蟹が居て鉄で山母の臍を搔切つた。あれやツつて山母はまた水桶から跳上つて上戸から飛び下りると、その下に居た牛の糞に踏づらのめつて(滑倒んで)打ツ轉んだところを、枋の上から胴摺臼がごしんと落ちて來て、びちよツと山母を打潰した。斯うして雀の息子は目出度親の仇討をした。



## 三二番 權平稻荷ごしよんべい稻荷

權平稻荷ゴンペイナリとシヨンペイ稻荷と謂ふ狐同志があつた。シヨンペイ稻荷が馬喰になつて、權平稻荷の方が馬になつて、いゝから村の長者ごんを騙すべえと謂ふ悪い相談をして居た。それを藪蔭で本當の馬喰が聽いて居た。これはよいことを聞いたと思つて、二疋の狐共の穴に入つた隙を見て、シヨンペイ稻荷の穴には土を一杯押詰オッペして塞いで置いて、權平稻荷の所に行つて、さアさア權平ごん、早く出て馬になつたりなつたりと言つた。權平稻荷は朋輩のシヨンペイだと思つたから、やあシヨンペイか何たら早かつた。さアそれでは俺も馬になんべえと言つて馬になつた。馬喰は其狐の馬を引いて行つて、長者ごんにひごく高値に賣りつけた。

狐の馬は長者ごんの馬舎から逃げて歸ると、シヨンペイ稻荷は土を押し退けて、今やつと穴から出たばかりのところであつた。何だお前はと言ふことになり、それでは此下の本物の馬喰に一杯食はされた。いゝから二人でこれから捕手に化けて馬喰の家に踏込んでえらい目に合はして遣るべと相談した。それをまた本當の馬喰は物蔭から聽いて居た。そして一足先きに家に歸つて、油鼠をこしらへて瓢箪に入れて置いた。

狐共は偉い捕手になつて、馬喰居たか其方居たか、昨日お前は長者ごんに偽馬ニセウマを賣りつけてしこたま金を取つたと謂ふことだ。召捕るから神妙にしろと怒鳴つた。馬喰は急セかないで落着いて居た。そして鼠の油揚げ入りの瓢箪を出して、恐しくリキミくさる(威張散らす)捕手の鼻先きを振り廻すと、捕手共は根が狐だから、それを食ひたくて鹽梅がわるくなつた。そして鼻端を出したり鬚ヒゲを出したり、しまひには尻尾を出してたうとう狐になつてしまつた。そして馬喰に繩かけられた。



## 三三番 蛇 男

或里に年取つた母親と、息子夫婦とが住んで居た。家がひじやうに貧乏で、息子は外に出て奉公をして居たが、その留守の間に夜々嫁女のもとに何處からともなく一人の美男が通うて來た。それが一夜ならず二夜も三夜もと度重なるので、嫁女も氣味悪く且つ困つて或夜、お前は何處の何と云ふ人だか知らないけれども、若し眞實の心があるならばこれから千夜通うて來てくなんせ。さうしたならばお前の心に従ひますと言つた。男は其夜から、たとへ雨風降り吹く夜でも毎夜毎夜女の枕許に忍んで來た。そしてじつと女の寢姿を見て居るが夜明になるといつも悄悄と歸つて行つた。嫁女は怖れて宵の中に家の戸口戸口を隙間無く堅く締切つて置くけれども、それでも何處からどうして忍込むのか、やつぱり其男は毎夜通うて來た。それ

が丁度九百九十九夜目の夜となり、残る明夜の一夜でいよいよ千夜の約束の時と押詰つた。其夜男の言ふことには、己はお前に戀焦れて生命もさゝげ根も盡して今夜で丁度九百九十九夜通うて來た。残る一夜の明夜で丁度約束の千夜に滿つる。若しお前が明夜承知が無かつたならお前の生命も又無いものと覺悟しろと、斯う言ひ置いて歸つて行つた。

其話を姑は物蔭に隠れて居てすつかり聽いたのであつた。さてもさてもこれは不憫な嫁女の心だ。なじよにしてこれを助ける工夫が無いものか、第一あの通うて來る男は世にも類無い程美しい男ではあるけれども、なじよな素性の男だべと、思案に搔き暮れて其夜はまんじりとも眠らないで夜を明した。次ぐの日起きて見ると、嫁女が顔色は極く悪い。其顔を見ると尙更不憫が増して、これこれ嫁女お前は何か心に苦が有るではないか、お前の胸に餘る苦がなるならば此姑に話してくれろ。おれは決してそんだの悪いやうには取計らぬぞと言つた。嫁女はお姑様の前に兩手をつ



き、實はお姑様、わが夫の留守に何處の何者とも知れぬ男が毎夜々々私の枕許に通うて来て、それが今夜で千夜の約束の晩となりました。な、よにかして此難題をのがれる工夫は無いかと思ひますども、私としてはよい分別もありません。何とかお姑様今夜のがれる工夫が無いものでありますべかと言うて泣くと、姑はさてさてそれは困つたことだ。それでは晩景來たらあの奥の座敷の佛棚の下に造つて置いた菊酒を飲まして見ろ、そしたら何物であるか本性を現はすべ。それが人間ならば仕方がないから約束の手前一夜の情をかけてやれ。又若しそれが何か魔性の物であつたなら、此嫁姑共々して成敗すべえぞと言つた。

其夜男が來たから菊酒をうんと飲みました。そしてひどく酔ひつづれて床の間一杯になつて寝るのを見ると、たうたう本性を現はして見るも恐ろしい大蛇であつた。そこで嫁女は長押から長刀を取下して其大蛇を斬殺した。そして姑を起して二人で其屍を切り割つて荷にこ、うた、ところが七駄あつた。それを殿様に見せて御褒美を貰

つた。

ところが其大蛇につれあひがあつて、夜になれば来て、嫁姑の家の周囲を恐しい唸聲を立て、夜明までぐるぐる廻つた。それが幾夜も續くので嫁女はたとへ何物でも殺してしまはねばならぬと思つて居ると、また其晩も來て家の周囲を唸り廻つた。嫁女は長押の長刀を執つて、其所に居る物は何物だか速かに本性を現はして名乗れと聲をかけると、外の怪物は、お前のさうして出はるのをば己は斯うして毎夜待つて居た。己こそお前の爲に生命を仕止められた大蛇のつれあひである。我夫は子欲しさに人間のお前を見込んで通うたのであるが其事を爲遂げないで遂に殺されたのが口惜しい。夫の仇を取るからさう思へど、言ふか言はない其中に女蛇は悪氣こそばつと吐きかけた。嫁女はお前如きにさいなまれる者ではない。お前の生命も其夫同様に仕止めてけるど、長刀で斬掛け斬掛け鬨ふと、大蛇は負けて、高山の山深に追ひ詰められて其處の谷間の大きな沼に鳴りを鳴らしてばえらと飛び込んだ。嫁



女は沼のほとりに匿れて待伏せして居ると、沼の中で聲がして、あの女には見込違ひをして何百年と早い夫の生命を詰めたが、今度は来る七月となつたならあたり近所の彼家の親類縁者の果てまでも皆殺して遣ると言ふと、相手の者の聲で、否止めろ、人間と謂ふものはさかしいもので又彼等がどんな考へを持つて居るか分るもんでない。ごだり(無謀)な事をしてお前まで生命を取られるやうなことをしてはならぬと言ふ。すると先刻の聲で、否々何が分るものか彼の家裏の麻畑に菌になつて生へてやる。さうしたらきつとそれを取つて食ふにきまつて居る。生命が百あつても堪つたものではないと言ふ。すると相手はそれでも其菌を爪をかける分も残さないやうに取つて高黍タカキビの殻を入れて濃い味噌汁で煮て芋殻の箸で左膳で食はれたらたまたぬでは無いかと言ふ。何それまで人間に分るものかと問答して居るのを嫁女は盗聞して家に還つた。

七月が来ると嫁女の裏の麻畑に一面に赤い美しい菌が生へた。嫁姑してそれを爪

のかゝる分も残さないやうにと釜箆に二つもあつた。皆土間の据釜に押込んで煮て、あたり近所の人達を呼び集めて左膳に仕組んで芋殻の箸で共々食つたがうまい事話の外であつた。それから三日目の朝に彼の山深の沼に行つて見ると、其沼からあり餘るやうな大蛇が屍となつて浮んで居た。

蛇の美男が嫁女に通つたのが何處から入つたかと言ふと、屋根の煙窓から出入したことが後で分つた。

二月十九日聴記。

### 三四番 三人兄弟の願掛け

或所に父と母とがあつて男の子三人持つて居た。一番兄を六平、次ぎなを權平、三番目を善平と言つた。父が病氣にかゝつたので、六平は神様に願掛けに往くと、

三人兄弟の願掛け



鳥居の方から小さな娘が赤い著物を着て踊りを踊つて来て、六平さん何處へ往くと  
言つた。六平は内々腹が立つて仕方がなくてお前のやうな小さい娘の知つたことで  
はないと言ふと、ほんだら此林檎を遣ると言つて、小娘は袂から赤い林檎と青い林  
檎を出してくれた。六平は可笑しな娘だと思つて其林檎を貰つて、先づ青い方を  
食べると、食べて居るうちに鼻の先きが痒くなつてだんだん棒切木ボウギリキのやうに伸びて  
大きくなつた。これは大變だと思つてあたりを見るときもう小娘も居ないから、其儘  
呆れ返つて其處に寢て居ると、次男の權平が兄の歸りが餘り遅いので迎へに來た。  
權平が兄の迎へに御宮の方へ往くと、御宮の側で赤い衣物を着た小娘が踊りを踊  
つて來て、權平さん權平さん何所へ行くと言つた。……………そして黄色い林檎をく  
れた……………

話者はこのあきは忘れてしまつて、どうしても思ひ出せなかつたもの。二日経つても三日経つても、そ  
れから全二年経つても遂に思ひ出せなかつた。古屋敷庄治君の話分。

## 三五番 猫 寺

或山寺でいくら小僧を置いてもいつとなく行末不明になつた。和尚は不思議に思  
つて或夜爐邊で側に居る虎猫に、虎や虎や此寺の小僧どもがいつの間にか何處かへ  
往つてしまふことが何とも不思議でならぬが虎は知らぬかと言ふと、虎猫は人語を  
出して言ふには、和尚様に言ふもいかゞであるけれども私は此寺に飼はれて來てか  
ら七代の和尚様に仕へて居てもかにも覺えて居るが、小僧と云はず和尚様までも  
皆此二階に住んで居る大鼠に取つて食はれてしまふと言ふ。和尚はそだら何してお  
前は其鼠を退治してくれぬかと言ふと、俺もそれを思はぬことは無いけれども、と  
ても俺一人では及ばぬから殘念ではあるが手出をしかねて居る。それで和尚様實は  
お前様の生命ばかりも安全に保ちたいと思つて居たと口説く。和尚はそれは大變で



ある。何とかよい方法がないかと言ふと、猫の言ふにはされば和尚様俺の姉が京都に居るが、それでも頼んで来て二人がかりでかかつたら、退治することが出来ぬものでも無いと思ふ。俺はこれから京都に往つて姉を連れて來度いから、三日の暇を下されたい。併し俺の留守中和和尚様の身の廻りを氣をつけて居申され。それから檀家の人達を集めて米四斗に枯節(枯れた鮭節)をだしにして雑炊をこしらへ、大きなハギリ(平桶)に入れて土間に置いてくれと言ひ置いて、己れは玄關の雨打石の上に坐り兩手で天を招ぐと、天から紫の雲が静々と下りて來たので、虎猫は其雲に乗つて行つた。

其後で和尚は俄に檀家を寄せて、虎猫の言つた通りの仕度をして寺を守つて待つた居た。

三日目に虎猫は、尾の長い三毛猫サンケネコを連れて天から紫の雲に乗つて降りて來た。二疋の猫は揃つてニワに据ゑ置いたハギリの雑炊を食ふ時には馬のやうに大きくなつ

た。そして虎猫が先きに立つて本堂の二階に上つて行つた。暫時經つと二階でわりわりと鬨ふ音が物凄しい。多勢の檀家達は下から、虎負けるな、三毛負けるなと一勢サンケに掛聲した。三日三夜と謂ふもの鬨ひ通してやうやう巨鼠を退治して二疋の猫は下りて來た。怪我だらけで見ると痛ましい姿であつた。檀家中で取り整へて置いた御馳走を出したが其半分程も食はなかつた。そして三毛猫は又雲を呼び其雲に乗つて京都へ還つて行つた。虎猫はこれで永らくの此寺の禍の悪鼠を退治したから俺は死ぬと言つて死んでしまつた。其虎猫を村中で猫座大明神と祀つた。

婆様曰。此話はおらは江刺郡黒石の正法寺の譚だと思ひ居た。二月十九日分。

### 三六番 岩泉の里

昔、岩泉の里にひごく貧乏な親子があつた。子供の二才になる時父親が死に、十



三になる時母親が死んで、たつた一人残つたので近所の百姓の家に世話になつて其家の駄賃づけとなつて居た。此子供だんだん大きくなるに連れて大の酒好きになり朝夕駄賃の往還に酒を飲んで馬にもかつちかすに来る。旦那は眉を擡めて馬の背中を痛めないようにもう少し氣をつけてけろ。なんぼ馬だとして生命も心もあるものだと小言を言つた。若者は俺は十三になる此年まで此家の厄介になつて成人した。此迄幾年となく毎日毎日駄賃づけに歩くが、一日に晝飯を貰つて行くより外に一文の錢も貰つたためしが無い。俺が酒を飲んだからとて旦那様の馬の背中などに鱗一尾餘計につけてお前の目を掠めたことが無いと言つた。ほだらばうご(汝)は何處から錢出してさう毎日酒飲んで酔つて戻ると言ふと、旦那様は酒と謂ふものは錢出してばかり飲むもんだと思つて居る風だから可笑しい。酒は山澤ヤマサハにも湧いてゐるもんだ俺は濱さの往還りに山でたゞ飲んで歩くと言つた。主人は怒つてそんたら俺を其處に連れてあえで見せろ、若しお前が偽言吹いたなら今日限りぼんだす(追放)からさ

う思へ、さあ俺を連れて其山さあべえと言つて、若者を連れて山へ往つた。其山に踏入ると何處からとなく佳き酒の香がして来る。往つて見ると岩の間から湧き出る泉がある。此泉が酒だと若者が言ふから汲んで飲んで見るとこれは本當に佳い酒であつた。主人は驚いてこれは寶酒の泉だ。俺は此處で酒屋を始めると言つて、大きな家小舎などを建並べ、それから種々態々な酒店道具など買ひ集めて大きな桶に泉の水を幾つも幾つも汲入れたが、皆たゞの水に返る。だが若者が飲むと忽ち佳い酒になつた。

そこで主人は、これは俺の寶ではない、お前に授つた寶だべから此酒店も諸道具も皆お前に遣るから此處で酒屋を開けと言つて盡く若者に遣つた。若者は其處の酒屋長者となつた。私の聞いて居るところでは其は今の岩泉の里だと謂ふことである。

註記。岩泉は陸中國閉伊郡、今の岩泉町である。此里には岩穴から一つの谷川が流出してゐると謂ふ。私はまだ行つたことがない。



## 三七番 雁取爺の後日譚

上の爺と下の爺とあつて箆掛けをして、上の爺は自分の箆に入つた木ノ根キネをば下の爺の箆に投込んで置いて、下の爺の箆に入つた雑魚を上げて来る。下の爺は其木の根を持つて来て割つて見ると白犬が出た。下の爺が狩獵に行くとき此白犬がいろいろな獲物をさせる。上の爺は羨んで其犬を借りて狩に出ると、何も獲れないどころか却つて龜蜂に刺されて怪我をしたので、怒つて犬を殺して土に埋める。其處から生へ出た米ノ木が下の爺には米を多く降らせて與へるが、上の爺にはベタ糞ベタの小便だのばかり撒き散らす。怒つて伐つて竈の火にくべると、又其灰は下の爺のためには雁取りの役に立つたので、上の爺は羨んで其灰を貰つて行つて、雪隠の屋根に上つて、天をゲクゲクと鳴いて通る雁に、雁の眼メクさ灰入れアウと謂ふのを間違つて、爺サンヂ

眼メクさ灰入れと言つて撒き散らしたので、灰は皆自分の眼に入つて盲になり、屋根の上からごろごろと轉び落ちて來たと謂ふ譚の續きである。

そして爺様が雪隠の屋根に上つて雁を取ると言ふのだから、下にはいつもの婆様だの嫁だの棒切れを持つて雁ガが落ちて來たらこれで撲叩いて殺すべいと思つて待ち構へて居た。さうして居るところに、屋根の上からごろごろと轉がり落ちて來た物があるから、それが爺様だとも思はず、それッ雁ガが落ちて來たでアと言つて嫁姑して持つて居た棒で撲叩いて殺してから、庖丁でじじじ切りにして、大鍋に入れてヒボト爐にかけて雁汁を煮た。そしていゝ加減に煮えたから、屋根の上の爺様も呼んで一緒に食ふべぢえと思つて、爺那やアい早く屋根から下りて來て雁汁を食うもせやと呼ぶと、鍋の中で、ほういほういと返辭をした。アレやと驚いて鍋の蓋を取つて見ると、ぶくんと爺様の翠丸が浮んで居た。婆様はあれア何のこつたえや、これア爺様ぢやないかと言つて驚いて、大急ぎで鍋から取上げて盆に載せて戸棚の中にしま



ひ込み、爺様が焼傷ヤケケになつたからお醫者様を迎へに行つて來ると言つて、あわてゝ外に駆け出して行つた。婆様の居ない中に小さい孫共が爐傍であくばると、戸棚の中で、孫ぞ孫ぞ火さあぶないぞと言ふ聲がする。孫共はあれア何だべと不審に思つて、戸棚の戸を開けて見ると、可笑しな物が盆ハシに載のかつて居るので、あれアこんな物が俺オラをえいめた。いゝからぶん投げべと言つて、それを雪隠セキコンに持つて行つて投げ棄てた。

婆様の方は少しも早くお醫者様を頼んで來て、爺様の火傷を直したいと思つて勢切キつて走せて行つて、醫者どのア居たしかと言ふと、醫者は生憎の留守であつた。それアことだ、それにしても爺様がなぞで居るかと思つて又家に駆け戻つて、草履も脱がないで臺所に上つて戸棚を開けて見ると、盆の上の爺様は影も形も見えないから泣聲になつて、爺様やい爺様やいと呼ぶと、雪隠セキコンの方でほういほういと返辭をした。あれア其方ソウチさ行つて居たのか、そんな怪我をして居ながら何たら爺様だ

べと言つて、雪隠セキコンの隅スミから拾つて來て盆に載せて戸棚の中に入れて置いて、今頃はお醫者様は歸つた頃だと、又駆け出して行つたが、まだお醫者様は戻つて居ない。そこで又斯うして居る隙にも爺様はどうして居るべと思つて犬戻りに家の方に駆け戻つた。

婆様の留守中に子供等は又爐傍であくばると戸棚の中で爺様は、孫ぞ孫ぞ火さあぶないと言ふと、子供等はあれア又彼の化物が來て入つて居るぞ。今度は大根畠ダイネに持つて行つて投げべと言つて、爺様を大根畠ダイネに持つて行つて投げ棄てた。其處に婆様は息を切らして走せ戻つて、爺那爺那なんて居たてやと言つて戸棚を開けて見ると、これはしたり又候其處には居なかつた。婆様は氣違ひのやうになつて、爺那爺那お前はまんち何處さ歩いて行つて居れやと呼び廻つても何處にも居ない。爺那や爺那やと泣きながら呼ぶと、ほういと今度は大根畠ダイネの方で返辭がした。婆様はあれアまんちあんな所さ行つて居たと言つて拾上げて來て、爺那爺那お前はそんな體



になつて居て、さう歩き廻るもんぢやない。また俺は醫者殿さ行つて来る中じつとして居申せと言つて今度は篋筒の中に入れてピンと錠をかつて、また醫者の迎へに駈け出して行つた。

今度は丁度幸ひに醫者殿は宅に戻つて居たから、お醫者殿しお醫者殿し俺家の爺様は大變なこゝになつたから早く来て診て貰ひたがんと云ふ。醫者殿はそれア大變だ、兎に角早く行つて見申すべえと言つて、婆様と一緒に駈けて來た。そしてやつと婆様の家に着いて、ほつとする暇も無く、婆様は取り急いで何か盆に載せた物を持ち出して來たから、醫者殿は、あゝこれはこれは珍らしいお菓子で御座るなど言つて、爺様をばくりと食つてしまつた。婆の大事の大事の爺様をさ。

### 三八番 鬼の子小綱

昔、爺と婆とがあつた。美しい娘を一人持つて居たが其娘が或日山に柴採りに行つたまゝ、鬼に攫はれて行末が分からなくなつた。爺は婆にあゝを頼んで永年の間其娘を尋ね探してゐた。爺は或日奥山に分け行くと、美しい袖の片切れが木の枝に引掛つてあつたり、手拭が柴に引掛つてあつたりした。なほも奥深く深く分けて行つて見ると、大きな岩窟があつて其前の廣場の木に著物を洗濯して干懸けてあつたが、それは娘が家に居た時に著てゐたものだつたから、懐しい娘が此岩窟の中に居るのだと思つて、申し申しと言つて訪れた。すると案に違はず中から變り果てた姿の娘が出て來て、アヤ父親ではないかと言つて泣く。爺も娘であつたかやい、俺はお前を今迄永年尋ね歩いて居た。どうしてこんな深山の奥の岩穴などに來て住つて居てアと言つて嘆くと、娘は私は鬼に攫はれて來て居ると言ふ。岩窟の中に入つて見る



と立派な座敷があり一人の綺麗な男の子が居た。此子は誰の子だと言ふと、娘はこれ私の子で名前は小綱と言ふが、此子が成人して歩くことでも出来るようになったら私は此處を遁げ出さうと毎日毎日考へて居る。八月の十五日の満月の夜になつたらアヲジコ鶯雀の仕度で里邊の方へ逃げて還るべかと思つて居ると言つて嘆いた。小綱小綱此人はお前の祖父様だからお父が歸つて來ても人間が此處に來たことを言ふてはならぬぞよと言ふと、小綱は俺は決して言はぬぞと言ふ。そして祖父をば室の隅の櫃の中に入れて匿して置いた。

其處に岩窟の主の鬼がごかりと歸つて來た。今日は餘り寒いので別段よいこともなかつた。何より早く火を燃せと言つて、爐邊ヒボトにうんと薪や柴をくべて火をどんがどんがと焚いて踏張フンバクカ跨つてあたつて、家の中を彼方此方と見廻した。そして鼻をフンかめかしながら何だか人間の臭ひがすると言つて直ぐに立ち上つて裏處に行つて見てから戻つて來て、此處に人間が一人來て居る。亂菊の花が一輪咲き増して居る

から匿しても分らないと言つて怒鳴つた。女は今迄お前には話さなかつたが實は三月程前から私の腹に子供が宿つて居ると言ふと、初めて鬼は打解けてひどく喜んだ。其翌日になつて鬼の外に出た後で、三人は此分ではとても十五日の夜迄待たれぬから一日も早く此處を逃げ出さう。それにはどうしたらよからうと相談をすると、小綱はよいよい俺は工夫をすると言つて、岩窟の中の所々に糞をたれて、しまいは屋根の上に乗で登つてたれて、此糞、性あらば父親が小綱小綱と呼んだらば、はいと返辭をしる。小綱小綱と呼んだらば、はいと返辭をしると言ひ含めて置いて、それから三人連れで其岩窟を逃げ出した。そして山を歩いてゐてははかどらぬから海の方から逃げようとして渚邊に出て其處に繋いで置いた船を解いて乗つて沖の方へ漕いで出た。

其後に鬼は歸つて來て、小綱よ妻よと呼べども返辭がないから内に入つて妻よ小綱よ早く飯を出せと言ふと、岩窟の中の方々でははいと言ふ聲がする。行つて見



ると誰も居なかつた。小綱小綱何處に居た。早く出て来て顔見せろと言つて鬼は岩窟の中を残る隈なく尋ね歩いて、しまひには聲のする屋根にまで登つて行つて見たが小綱は居ずに小綱のひつた糞ばかりある。返辭するのは此糞ぢやないか、之れは妻子の者が逃げたのだと氣がついて鬼は海の渚へ駈けつけて見ると、もう三人の乗つた船は遙か沖合の方に見えてゐる。鬼は地駄太踏んで直ぐさま岩窟に走せ歸り寄せ貝をばほほと吹き鳴らすと、あたり近所の多勢の鬼共が、それ頭の所に何事か出来たと寄集つて來た。鬼の頭はそれらの鬼共を引連れて渚に駈付けて皆一勢に四這ひにさせて海の水をがツわがツわと吸はせると、親子の乗つた船が沖から引戻されてしまつた。そして既にすか(渚)に船が引着けられるやうになつた時、小綱はやにはに母親の尻を捲つて朱塗の篋で小叩きすると、それを見て鬼共は一度に吹出してしまつてごつと海の水を吐戻して、一勢に笑ひながら家に歸つた。其お蔭で船は無事に親子の故郷に歸ることが出来た。

其里で小綱は成人した。大きくなるに従つて人間を食ひたくなつてとても堪らなくなつた。或日爺那爺那俺はごうしても人間を食ひたくなつて堪らぬから一層のこゝと俺を殺してくれぬかと言つた。祖父はそれを聽いてひどく嘆き、孫々如何にお前が鬼の子なればとて實際の吾が孫であつて見れば殺せないと云ふと、小綱はそれでは仕方無いから俺は自分で死ぬと言つて、山に行つて木柴を多く採つてそれを積んで小舎を造り、其中に自分が入つて火を點けて自ら焼死んでしまつた。そして其焼灰が風に吹飛んで虻蚊アブカになつて自由に人間の生血を吸ふやうになつた。

### 三九番 葦子萱子譚の後段

葦子は先腹の娘、萱子は今の女房の子、父は旅に出で留守のところを見計らつて繼母は葦子を亡きものにしようとして、種々な悪い企をしたあげく、同類の多勢の荒く



れ男を頼んで、石の唐櫃カルトに入れた姉の葦子を、奥山に擔いで行つて土を掘つて埋めて来た。それを姉思ひの萱子が姉助けアネコに奥山に尋ねて行つた。(こゝまでは此譚の類話の米福糠福や糠穂と朱皿譚と同様である。)

それから萱子は、姉と別れる時、石の唐櫃カルトに入れて遣つた笹絲をたよりに、姉の在處アリカを尋ねて奥山奥山と歩いて行つた。家を出る時、母親からおら今日山さ三葉ミツバを掘りに行つて来るからと言つて貰つて来た炒米チヤウを口に入れて噛み噛み行つたが、いくら行つても笹絲が長く長く續いて盡きなかつた。やがて笹絲が盡きたから其邊を見ると、新しく土を掘返したやうな處があつた。あゝ此處だと思つて、持つて来た木割で土を掘り掘り、姉こやい姉こやいと叫ぶと、初めのうちは少しも返辭が無かつたが、段々と幽かな返辭が聽えて来た。萱子はあれあれ姉はまだ生きて居ると思つて、土に口を押付けて、姉やい姉やいと叫びながら掘つてゆくところどうどう石の唐櫃に掘り當てた。そして錠を木割で叩き壊して姉を中から出して見ると、始終泣い

てばかり居たものだから眼が泣きつぶれて盲となつて居た。萱子は悲しくて悲しくつて抱きついて泣くと、萱子の左の目の涙が姉の左の眼に、右の眼の涙が右の目に入ると、姉の目はぱつちりと開いた。そして妹やい、萱子であつたかど一時泣いて居たが、いつまでも斯うして居るところでもないから、さあこれから家に歸りませうと言ふと、葦子はおらは家さば厭イヤんだと言つた。そだらおれも家さば歸らないから二人で何處か知らぬ國へでも行くべと萱子も言つて、澤水の流れ下りるのに従つて谷を下りて来た。さうすると村屋に出た。姉妹は路傍の石に腰を掛けて憩んで居ると、そこを一人の爺様を通つた。姉妹を見て、お前たちは見れば見るほど美しい娘達だが、何處から来て何處へ行くと言はれて、姉妹は悲しくなつて、私たちは流れ水のやうな身の上の者どもだもの。花見心に山に迷うて此里まで来た者だものと言うたが、妹は否々爺様私たちは斯ういふ身の上だと眞實の事を物語つた。それを聽いて爺様は、それはさてもさても情無い身の上だ。それでは俺はよい所に世話を



するから一緒に來うと言つて、山に行くのを止めて、姉妹を連れて村屋一の長者の館イカダに行つた。其處の長者の館に姉妹は奉公をすることに爺様にしてもらつた。そして其長者の館では姉妹の技倆氣兼に感心して、遂に息子兄弟の嫁子にした。

それから七年目の或日のこと、長者ごんの館の表の門に、一人の汚い乞食爺様がカンカンと鉦を叩いて立つた。其唄ふ文句をよく聽けば、葦子萱子があるならば、何しにこの鉦叩くべやいと言ふのであつた。盆に施しの米を載せて出た主婦カカサマ様が、其唱ふる文句に不審を起して、これこれ葦子萱子、今門立ちした乞食爺様が、葦子萱子があるならば、何しにこの鉦叩くべやいと言つたが、若しやお前達の父親ではなかべか、早く追ひかけて行つて見ろと言ひつけた。姉妹は乞食爺様のあとを追ひかけて行つて見ると、姿こそは變り果てたが、間違ひもない自分等の父親だから二人は爺様の両手に縋みついて泣き沈んだ。爺様は葦子萱子の二人の娘ども居なくなつてから繼母も急病で死んでしまつたし、娘ども戀しさにそれからそれと永い旅路

を重ねて居るうちに、あんまり泣いたものだから眼を泣きつぶしてしまつて盲となつて居た。それで葦子やい萱子やいたつた一目でよいからお前だちの顔を見たいぢややい、娘の顔を見たいぢややいと泣いた。すると姉の泣く涙が爺様の左の目に、妹の泣く涙が爺様の右の目に入ると爺様の目が開いた。あや嬉しいぢえ、嬉しいぢえと親子三人は互に抱き合つて泣いて居た。そこに姑殿が來て爺様を連れて館に歸つた。父子三人は其長者ごんの館に一生楽しく暮した。

(一)炒米は種籾を水につけたものを炒つた米である。此話及び第四〇番話は古屋敷庄治君より聽く。

#### 四〇番 桶屋の昇天

或處に桶屋があつた。大きな酒桶サカコガを結つて居たが、ひどく無理に箍ツガをかける時、箍が弾けて、其はづみに吹飛ばされて天の上に往つて雷様の屋敷にまぐれ込んでし



まつた。雷様は驚いて、見たことのない人だが何處から来たと言つた。桶屋は日本から来たと言つた。それは丁度よいところに來てくれた。實はこれから雨撒きに出懸るところだが、水袋持ちが無くて困つて居たつた。どうだいお前手傳つてくれぬかと言はれて、桶屋はい手傳ひますべえと請合つた。それでアと謂ふので仕度をして、雷様は八つ太鼓を叩き鳴らし、桶屋は水袋をもつて下界にざあッざあッと俄雨を降らせながら雲に乗つて天上を飛び廻つた。さあ下界では大騒ぎで、干物を掻きさらふ婆様もあれば、田の畔が落ちるつて走せ歩く百姓どもなど手に取るやうに見えた。餘りの面白さに圖に乗つて夢中になつて駈け廻つて居るうちに、雲の隙間から足を踏み外して、思はずギンと下界に落ちてしまつた。

天から落ちた桶屋は或る大寺の境内の大木の梢端シシバコに來て引懸かつた。なほしても下りられないから、助けてける、助けてけると叫ぶと、お寺の中から和尚様が出はつて來て、大木の梢端シシバコの方を眺めて見た。ちえちえ皆出ミシナて見ろ、先刻の雷様で人間

が天から降つたと言ふと、小僧どもやあたり近所の人々が多勢ぞろぞろと寄集つて來て、其大木の周圍ケルリを取巻いて大騒ぎになつた。木の上では助けてける、助けてけると呼ぶから、下の人にはそれア何がよかべと言合つて、綱を持ち出して投げ上げて見たがどうしても届かなかつた。それでアこれやよかべと言つて、寺から大きな四幅風呂敷を持ち出して、風呂敷の端々ハシバシを多勢で持つてピンと引張つて居て、それそれ木の梢端シシバコに居る人やこれさ落ちて來うと呼ぶと、そんだらと思つて桶屋はそれにギンと落ちて來た。ところが落ち來た勢ひで風呂敷がしわんで多勢の人達の額デシビがカチンと鉢合はさつた。すると其處からピカッと火が出て、其大木に燃え移つて、其木が火になつた。だからそれは今の檜だつたらうと謂ふ話。



四一番 人喰ひ花嫁

一四六

或る裕福な家に一人娘があつた。婿を取つたが其婿は二夜と居る者が無かつた。其事で両親はひどく心配して居た。それで工夫にはばけたあげく、門前に、何處の誰でもよいから此家の婿になりたい者は来て婿になれと謂ふ高札立てた。或所のならず者があつて其高札の文句を見て其家に行つた。門前に立つたる高札の表について来た者だと言ふと、まづまづと言つて娘を出した。娘を見ると目の醒めるやうな美しい女ではあるし、家はよし大喜びで婿入りの御祝儀を濟ました。其中に夜になつた。花嫁は婿殿の手を取つて床に入つたが、婿ばかり寝させて、私は少し後から寝ますからと言つて、座敷の片隅の机の前に坐つて何かの書物を一生懸命に讀み始めた。人ばかり獨り寝せて置いて何たらことする女子だべと思つて婿はちらりちらりと娘の方ばかり見て居た。娘は夜半頃になるまでさうして居たが、誰も彼も皆寝

静つた刻限になると、初めて婿の方をちらりと振り返つて視て、立つて来てそつと寝息をうかがうた。婿は狸寝入りをして見せた。すると娘は美しい顔でにっこりと笑つて、よく眠つたなど言つてまた元の机の前に戻つて行つた。そして片膝立て、疊一枚をめくつて床板を放して床下から何だか得體の分らない箱を取出した。婿ははて不思議な女もあればあるものだ、あれは何の箱だらうと思つて、寝息を殺してよくよく氣をつけて見て居ると、娘は靜かに四邊を見廻して居たが、誰も見て居る者がないと分ると、そろそろと其箱の蓋を押し開けて、中から二歳ばかりの嬰兒の屍をつかみ出して机の上に乗せ、傍の庖丁を執つて其兒の片腕を切つて、さもさも甘さうににたりにたりと食ひ始めた。

婿は驚いて思はず起き上つて外に出たが、思案して否待て此事を姑舅にも話してからのことにしようと思つて又室の中に戻つた。ところが女は少しも騒がず其兒どもを食つて居た。そしてお前様はお寝みになつたらよいぢやないかと靜かに



言つた。そこで婿はこれお前は鬼神魔神の物であるか、何して人間を喰ふと言つて  
 脛をおさへると、女は私は何で鬼神魔神のものであるべ。お前さんもこれを食つて  
 見ろと言つて、庖丁に片手を切つて突掛けて男の口元に差し出した。男は其手を取  
 つて揉ぢ伏せて、これ兩親様早く起きてけろと言つた。其時女は男の手から振り放  
 れて、いやこれこれ静かにして下さい。お前さんは眞實の男である。今迄は來る男  
 も來る男も私が此菓子喰ふのを見ると、其夜の中に逃げ還つたが、お前ばかりは  
 一旦外に出たけれども復戻つて來て此私を捕へてくれた。お前の勇氣も度胸も初め  
 て分つた。これは餅でこしらへた物である。お前さんなら此家の婿にしても不足は  
 無からうとて、始めて婚禮の床入りをした。

#### 四二番 繼娘茶碗子

父母があつて娘が生れて茶碗子と名をつけた。其中に母親は死んだので、後妻を  
 貰つた。後妻は初めのうちは茶碗子によく手當をして育てて居たが、九つになつた  
 時自分も懷妊した。自分が生む子は男の子か女の子か分らないけれども、ごつちに  
 しても先腹の子の茶碗子があつては此家の後繼にはならぬ。生れてしまつてか  
 らでは世間でどうの斯うのと言ふだらうから、生れぬうちに殺してしまはうと思つ  
 て、これこれ茶碗子や今日は味噌豆を煮るから土間の据釜にこれで水を一杯汲んで  
 置けやいと言つて、一つの目籠を預けた。茶碗子は目籠をもつて川戸に出て、はて  
 はて此目籠でなぞにして水を汲むなど泣いて居ると、川戸のほとりの小屋から婆  
 様が出て來て、茶碗子茶碗子、お前はなににして其處に泣いて居れやと言つた。そこ  
 で茶碗子は其譯を話すと、老婆はあゝあゝ何て話だか、それでは仕方がないからお



前の兩方の袂を水に浸して、それをしばつて釜に入れて一杯にしろと教へた。茶挽子は婆様から教はつた通りにして、自分の兩方の袂を水に浸しては釜に持つて行つてしぼりしぼりして遂に釜に一杯水を汲んだ。繼母ガガな繼母ガガな釜さ水を汲んだますと言ふと、繼母はほんだら釜ノ口さ一杯薪を搬び入れて火を焚付けろと言つた。茶挽子は釜ノ口一杯薪を搬び入れて火を焚付けた。釜の湯がぐたぐたと煮え返つたから繼母ガガな湯が沸きんしたと言ふと、うんどうんどうぐたぐたと煮えくり返せと言つた。茶挽子は尙も薪をくべて、釜の湯をうんどうんどう煮えくり返して、釜の湯がうんどうんどう煮えくり返りんしたと言つた。すると繼母は、それではお前は苧殻ヲガラを一本持つて來て釜の上に橋を架けると言つた。茶挽子はいと言つて苧殻を一本持つて橋を架けると、繼母は茶挽子お前はそれを橋だと思ふべなと言つた。茶挽子はそんな物は橋ではないと思つたけれども、繼母の權幕に恐れて、若し橋でないと云つたら叱られると思つて、はいと返辭すると、繼母はそれが橋だら茶挽子渡れと言つ

た。茶挽子は其苧殻の上に足をかけると折れて倒さまに釜の熱湯の中に落込んでしまつた。繼母は其上にびんと蓋をして置いた。

茶挽子の父は駄賃づけであつて、其日外から歸つて來ると、馬が門口から後退りして家に入らなかつた。ざいざい今歸つたと言つても、いつも迎へに出る茶挽子も女房も出ぬので、はて不思議なこともあるものだと思つて、獨りで馬を厩の中に入れてようとしても馬がなかなか入らないので、馬の手綱を取つて少しおらえて、(躊躇)居ると、時でもないに土間の据釜ヒツの中から湯氣がばやばやと立つてゐる。はてなと思つて蓋を取つて見ると、茶挽子が入られて煮られてぐれぐれと煮繰り返つて居た。父は驚いて、直ぐに釜箸ですくひ上げて、ちやんと俎の上に載せて戸棚の中に入れてしまつてから、泣きながら走せて代官様に行つた。そして代官様代官様どうぞ私の家に来て下さいと言ふと、さらば何用だ何用だと言つて父と一緒に來ると、父はまづ酒を出して代官様にすゝめた。代官様は盃を重ねて居ると、父は戸棚から



茶碗子の屍を取り出した。代官様は驚いてあつこれは何だと言ふと、父は形を改めて、さて代官様しこれは私の留守の間に女房がこれだけの仕度をして置きました故可然御法を頼むと言ふと、代官様は早く妻女を此處に呼ばれ呼ばれと言つた。繼母は其處に出ると直ぐに繩をかけられた。そして連れて行かれて牢屋に入れられた。それから二三日経つと、代官様からあたり近所の女房達に薪三本宛持つて出ると謂ふ御布令が出た。何事だらうと云つて各々薪三本づつ持つて代官様の門前に行く。繼母は兩脚を二疋の牛の體に縛り着けられてあつて、二疋の牛の間に持ち寄りの薪でごんごん火を焚いて、牛裂きの刑オシオキにあつて殺された。

#### 四三番 鹿娘の梗概

深山の奥で立派な女房がお産をして女兒を生んだが、産後の病氣で死ぬことが分

つたから、其處を通つた鹿の角に嬰兒を結び着けて放して自分は死んだ。其鹿が或る山里の爺様婆様の所に行つた。爺婆には子供が無かつたから拾つて育てた。鹿が連れて來たから鹿娘(或は鹿姫)と名をつけた。鹿娘はひごく美しい娘になつた。

その爺様婆様が死んだ後に、鹿娘は里邊に下りて、長者の竈の火焚女になつた。其家の和子様は鹿娘を見染めて病氣になつた。其娘に因縁の絡んだ老婆(それは古蛙であつたか鹿であつたか)が出て來て三つの試みをなし遂げた娘を和子の花嫁にする。病氣は直ると言つた。試みと云ふのは、一は梅ヶ枝に雀のこまつたまゝで手折りし娘、二は引綿の上を新し草履で渡つて草履に引絡めぬ娘、三は水面を渡つた娘、この三つである。村々から數多の娘達が寄つて來たが、誰一人として三つの中一つも出来る者はなかつた。最後に竈の火焚き女の鹿娘はそれを首尾能くなし遂げて、長者の花嫁子となつた。

古屋敷庄治君話。



## 四四番 死衣の片袖

日本の國中の名山をかけたいと志願をした六部があつた。越中ノ國の立山に行つた時、麓の里の宿屋の主人に、御山の夜山は三年此方山止めになつて居るから思ひ止まれと言はれた。さうは言はれたが折角の願ではるばる來たものだからと言つて笈の中から金を五十兩取り出し、私が身に若しやの事があつたなら何卒宜しく頼むと行つて宿屋の主人に渡し、笈も其處に預けて身輕になつて御山に登りかけた。非常に艱難辛苦して眞夜半頃あらかた御山の頂上眞近かになつた頃だとは思つたが、餘りに疲れたので路傍の岩蔭に凭つて暫らく息をついて居た。其中に山は大荒れに荒れて四邊は眞暗になりもう一足先きに踏出す我慢もなかつた。すると山下の方から不思議な風が颯と吹上げて來たと思ふと、のちのちと歩く足音がするから、はて

今頃何物だらうと氣澄んで居ると、下の方から眞裸體の大男が頭に大釜をかぶつて登つて來て六部の蹲つて居る前を通つて行つた。あなやと思つて居ると又今度は大桶を擔いだものが通つたり、薪を背中へ山のやうに背負つたものが通つて行つた。やがて御山の頂上には盛んに火が燃え立つて、それから大釜の湯が煮えたぎる音がする。其時大きな聲で、罪人三源太出ると呼ぶ聲がした。するとうら若い女の聲でさもさも哀れな聲ではいと謂ふ返辭がして、たまげた美しい娘が引摺るやうな振袖の著物を著、白緒の草履をはいて悄悄とやつぱり六部の屈んで居る前を通つて行つたが、頂上に行くと、忽ち其大釜の中に投げ込まれて、熱い苦しいと聲の限りに泣き叫んだ。やがて其泣き叫ぶ聲も虫の音のやうに低く微かになつた時、傍に居た大男どもは又木に突掛けて娘の體を釜から上げて土の上に投げ出した。娘は暫くは身動きも出來なかつたが、やつと息を吹返して靜かに立ち上つて著物の袖を搾つたりはだかつた裾を引寄せて湯を搾つたりした。其男共は娘に向つて、おい娘今夜はこ



れだけの責苦だが、明夜からは火責めの責苦に遭はすからさう思へと言つて、ノコリヒ残火をば蹴散らして何處へか立ち去つた。其有様を六部はいつ近寄るともなく近寄つて見て居たが、今其娘も其處を立ち去らうとするので、これこれ娘と呼び止めた。娘ははいと言つて立ち止まつた。六部は娘に、最前の様子は此處で残りなく見てしまつたが、これには何か仔細があるだらう、差支へなくば話して聞かせてくれ。すると娘は泣きながら、私は此御山の麓の町の米屋の娘で、三年前に死んだ者でございます。私の父は三源太と言ひますが父の悪業の身代りに立つて世を去つてからは、毎日毎夜の此責苦に遭はされるのであります、なんとかあなた様が米屋三源太を尋ねて、私が斯う謂ふ罪の責苦に遭つて居ることを話して下さいと言ふ。六部はそれを聽いてさて世にも不思議な哀れな話である。どんなにかしてお前の責苦は救ひたいが、お前の父御の三源太殿とやらが、俺が斯うして立山でお前に逢つたと言つたさて、死んだお前のことだから、どうして眞實のことに思ふべや。それには何

か證據シムシになる物でも無いかと言ふと、娘は成程さうでございます。では私の此著物の片袖をあげるから此を證據シムシに持つて行つて見せて下さいと、かよいよ細かい手で其を揉ぎ取らうとしたがなか／＼取れない。六部様何か刀物をお持ちではないかと言ふ。六部は袂の中を探して小刀を渡すと、娘はそれで片袖を切つて六部に渡し、もはや時刻にもなつたから、六部様何卒お頼みますと手を合はせて伏拜んで、其儘悄悄と何處へか立ち去つた。

そのうちにしらしらと夜明になりかゝつたから、六部は頂上の祠に參詣をして山を下つた。宿屋では人夫を頼んで六部を探しに出掛けると折よく途中で出會つたが皆六部の無事なことを不思議がつた。宿屋に落付くと、主人初め人々にお客人山で何も不思議なことがなかつたかと訊かれたので、昨夜の事を話し、米屋三源太の娘がひどい責苦に遭つて難儀をして居るが、其爲に夜山は荒れることである。其米屋三源太と云ふ家を知らぬかと言ふと、名前は如何にも聞いて知つて居るが所は何處



だか知らぬと言ふ。それで六部は其宿屋を立つて、米屋三源太の家を尋ねて歩いたが、三日目に漸く其家の在ると謂ふ町に行き着いて様子を訊くと、三源太の評判のよく無いことは話の外で、五升の米を買へば三升しか無し、賣升は小升を使ひ買升は大升を使ふと謂ふ風で、お上から役人が来て調べると如何にも其通りであつた。こゝに哀れな話は其家に使はれて居る下女のお百で、其時升目の咎を皆ぬりつけられて、何も知らぬお百は召捕らはれて今はお上の牢に入つて居る。あんな剛愎無道な悪人は何處の世界にも無いもんだなどと悪い噂ばかりである。六部は米屋の店前に行つて見ると成程話よりも立派な大きな構への家である。お頼み申すと言つて入つて行くと、店前に居た主人三源太は、お前は何しに來たか米を幾何買ふかと言ふ。俺は御覽の通り乞食同様の旅の者、米を買ふ訣の者ではないが、折入つて主人に話したい事があつて來たから何卒次の間にでも通してくれ、ゆるゆると話したいと言ふと、そんな前口上はごうでも宜いが、先づごう云ふ話か。それでは此方に入れと

言つて、三源太は先きに立ち六部も續いて次の座敷に入つて行つた。それから六部は實はお前の娘は立山の頂上でこれこんな責苦に遭つて居る。それもこれも皆お前の剛愎非道義理人情も知らぬ悪業の報いであるから、何とか片時も早く供養して娘の往生を安らかにしてくれと言ふと、三源太は火のやうになつて怒つて、これお前は何處の欺り六部奴だ。偽言もよい加減にしろと言ふ。そこで六部は笈の中から娘の死衣の片袖を取り出して、偽言と思はゞこれを見ろ、此片袖によもや見覚えが無いとは言はれまいと言ふと、次の座敷から三源太の女房も駆け入つて來て、あやゝ此は娘に著せて遣つた振袖の片袖である。あゝ娘は毎日毎夜御山でそんな地獄の責苦に遭つて居るのか、と言つて泣き嘆く。さうなると三源太も娘哀れに泣いても泣いても盡せない程であつた。

それから三源太は六部と相談して、町中の貧乏で困つて居る人々には米を施して遣り、無實の罪に惱んで居る下女のお百を山と金を積んで罪をあがなつて牢屋から



出して来る。それから店の表に千人攝待と書いた高札を立て千人供養と謂ふことを始めた。

千人攝待の供養をはじめてから、丁度九百九十九人に施をして、あと一人で千人目の攝待も済むと謂ふ時になつたが、其日はなかなか人が遣つて來ないので、三源太夫婦はひどく起縁の少ないのを嘆いて氣を揉んで居ると、其日もずつと遅くなり、人肌もやつと見えるか見えぬ程の刻限に、一人の汚い乞食爺様が街道を通うた。それを見て三源太夫婦は、あれあれ彼の爺様を早く呼んで攝待をせと言つて、人を出して追ひかけらせて強いて家に呼び入れて、私達は死んだ娘の供養の爲に斯様な攝待をして居るのだから何卒請けて下さいと言つた。乞食爺様はひどく喜んでそれは奇特なことである。然し俺は御覽の通りの惡病業病に悩んで居る者、お前達の手から直接に物を受け、お前達の立派な家の敷居を跨ぐことは何とも申譯が無いと言ふ。見ると如何にも顔はなれ腐れて膿がだらだらと流れ出で、目鼻立もわからぬや

うな物凄しい形相、手足も殆ど不具になるまで病氣が進んで居て、側に寄ると魚の腐つたやうな臭ひがした。三源太夫婦はなんのなんの病氣は時の魔物、少しもそんなことには遠慮はいらぬから、早く上つて懋めや飲めや、今夜はどうぞ此家に泊つて下されと下にも置かぬもてなし振りに、乞食爺様も初めて安心して座敷に上り込みひどく喜んで其夜は其家に泊つた。ところが其夜爺様はひどく病んで苦み廻るので主人夫婦は痛いか痒いか湯よ水よと大騒ぎして手厚い看病を盡したが、病の苦みは少しも落着かばこそ、爺様は床から苦しまぎれに這ひ出て、もしもし旦那様俺の一生一代の願ひであるが、とても此鼻の穴に膿が一杯に詰つて今にも息が止まりさうである。なぞにかして此鼻の膿汁を勿體ないがお口で吸ひ取つて下さいと言ふ。三源太夫婦もそれには眉を顰めたが、否々娘の爲の供養だ。これしきの事が出來なくてどうすべえ。よしよし爺様今二人で代り代りに其膿汁を吸ひ出して樂にして上げるからと言つて、夫婦は爺様の鼻の膿汁を吸ふと、力籠めてのつとめであるから



思はずぐつと飲み込んでしまつた。其時乞食爺様はあつと言つて起き直つて、はてはて三源太夫婦よ、よくもこれまでに心を直して下された。お前の娘はお前達の悪業の爲に今迄毎日毎夜の責苦に遭つて居たのだが、今のお前達の慈悲善心の程は見届けたによつて、娘の身をば今より佛菩薩の身に直し天人界に送り届けよう、何隠さう斯う申す此俺こそは薬師如来ではあるぞよと言つたかと思ふと、忽ち體から光明がびかびかと輝き出し、よい花ハナのやうな香ひが四邊に放たれたかと思ふと、雲を呼んでそれに乗つて静々と天上界にお登りになられた。

三源太夫婦及び下女のお百、其他あまたの下女下男の者共も、皆これは夢ではないかと、其場にひれ伏して拜んで居ると、天上に俄かに美妙的な音樂の音がして、光輝いて飛んで通るものがある。皆の者があれあれと言つて仰ぎ見ると、十二菩薩に取りかこまれて現在自分の娘が片袖の無い振袖を着て、下界の我が父母を眺めて通る。三源太夫婦はあれあれ娘よ娘よと泣いて其尊い姿を見送つた。其事があつてか

ら、米屋長者の三源太は死んだ娘と同じ齡の今年十九の下女のお百に後繼をばさせて、自分等夫婦はさきの六部と諸共に諸國巡禮の門立をした。尙又三年此方毎夜毎夜の山荒れした立山も、それからは何事もなかつた。

二月二十日の聴話。

#### 四五番 和尚と下男

或山寺に、和尚様に負けぬで何でも知つたか振りする下男があつた。或日和尚様は此下男に、町へ往つて一石六斗の鳥、十里の魚、天目ナシモクの錦の酒を買つて來うと言ひつけた。下男はさう言ひつけられてさすがに分らぬから、町端れから店屋を一軒一軒訊き始めた。そんなものは何處にも無かつた。併し其等の品物を買はずに還つたら今日一日で和尚様に輕蔑されると思つて、困つて町端に立つて思案をしてゐる



と其處に四五人連れの立派な和尚様達が通りかゝつた。何處へ御座るべと訊くと、今日は在郷に發句會があつて其處へ往くのだと言ふ。其發句會と謂ふのはどう謂ふことをやるものだらうと思つて下男は其人達の後について行くと、やがて立派な家に着いた。すると内から品のよい翁が出て来て、お師匠様達よく御座つてくれた。さあさあ早く中さ入つて御座いと言ふ。皆中に入るといろいろな御馳走があつてから愈々其發句會が始つた。下男はそれを見聞してゐたが皆の話の途切れの合間に、もしも皆様一石六斗の鳥と謂ふものはどんなものでがすと訊いた。すると和尚様達は笑つて、それかそれは鳩鳥が二羽さ。そんだったら十里の魚とは何のことではがんと復訊くと、なんだそれはゴリカジカの事ぢやないか。そんならば天目に錦の酒とはと重ねて訊くと、さてもさても此下男は可笑しい事を訊ねる男だ。それは瓢箪に入れた濁酒のことなんだと和尚達はすらすらと譯も無く皆解き聞かせた。下男は喜んで其等の品物を買ひ整へて寺に持還つた。和尚様は内心では驚いたが、それで

もうわべでは、あゝよく買つて來たとていつになく其等を下男にも御馳走した。

四六番 猫 貞

或所に貞吉と云ふ男があつた。放蕩の結果家を飛出して仙臺の方へ流浪して行つて、或る農家に奉公して居た。仲々實態に働くので其中に主人の最負になり二番目娘を妻に貰つたりして随分永い事其家に居たが、斯うしていつまで旅の空に居ても始まらぬと思つて、擅那から永年の身代金を貰ひ受けて妻を連れてはるばると久振りで故郷の吾家に歸つて來た。見ると吾家はひどく荒果てゝゐる。そこで四邊近所の人達に助けられて軒下の人の背丈に生へ伸びてゐる蓬草を取つたり、家の中に積つてゐる塵芥を掻漉つて貰つたりして、やつと吾家に夫婦で落着いた。さうして居るところに、ざいざいもらひびごのが歸つたが居たかやと言つて、昔の博奕打



友達が訪ねて来た。久振りで會つたので貞吉も酒肴などを取出して一日一杯話して暮した。その男もひどく喜んで夜まで話込んで居たが、貞吉が小金を持ち還つた事を聴くと悪心を起して遂近所の博奕宿に誘ひ出した。貞吉も元から好きな道の事故誘はれるまゝにそれから毎日往つたが、往く度毎に負けて少しの間に旅の空で永年働いて貯めた小金をみんな取られてしまつた。それでも何とかして其金を取返したいと思つて夜晝博奕宿に往つたが、金が無いので仲間から始終悪口を言はれ通してあつた。

或夜久振りで五兩勝つたので、早く家に歸つて妻に喜ばせようと思つて村家の路を急ぎ足に來ると、夜更けに或家で大騒ぎをして物を追ひ廻す烈しい音がしてゐた。何事だと思つて一寸立寄つて隙見すると、それ戸棚に入つた今こそ打殺せと言ひ罵つて居る。貞吉はたまりかねて中に入つて訊くと、何のこともない虎猫の野良猫退治だと言ふ。それは可愛想なことだ。どうだ其猫を俺に五兩で譲つてくれぬかと

言ふと、其家の人達は喜んで貞吉に五兩に賣つた。貞吉はそれを懐中に入れて家に歸つた。そしてざいざい嬾やい早く此猫に飯を食はせろ、可愛想に何處某の家さ入つたばかりに危く撲殺されることを五兩出して買つて來たと言ふと、女房も起きて飯を食はせたりした。其虎猫は食ふの飯を大食ひした。夫婦は笑つて其夜は貞吉は抱いて寝た。虎猫や虎猫や俺が食ふにいゝ中はお前にも食はせて置くからこれから必ず他に行つて悪い事などして、殺されるやうなことをしてはならぬぞと言ひきかせて、脊中を撫でて抱いて寝ね寝ねした。

貞吉は其後もいつも負けてまた元のならず者の貞吉になつた。毎日の催促に詰めかけられて皆家財道具は取られてしまつて雨戸ばかりになつた。そこで夫婦は相談して一層のこと妻の里に夜遁げでもしよう。虎や虎やこれまで折角お前を飼つたけれど今お前が聞いて居る通りの有様で、お前を棄てねばならぬことになつたが、だごも決して他に行つて悪い事をしてめい、(残酷な目)に遭ふなよとよくよく言聽か



せて虎猫をば家に置いたまゝ夫婦は夜逃げをやらうとした。ところが其夜は急に大嵐となつて雨戸一寸外出することが出来なくなり、この嵐ではとても何處にも行かれぬと言つて夫婦は寢室に入つて翌朝までぐつすり寢込んでしまつた。翌朝は嵐が止んでゐたが日が高くなつてゐたのでとても逃出すことも出来ず、斯う眞晝間になつてゐては何處にも行かれないが食はないで居る譯にも行かぬがどうしたものかと言ふと、女房は俺は二枚着て居るから下着を脱いでやるから賣つて米を買つて来てけいて、がんと、言つて下衣を脱いで渡されたから、貞吉はそれを持つて行つて賣つて米を買つて来て御飯をたいて自分等も食ひ猫にも食はせた。それから其日も二人は寢てしまふと又どつくりと眠つた。そして貞吉は次のやうな夢を見た。…貞吉殿貞吉殿俺は五兩でお前に命を助けられて今日迄も大事に飼はれて来たから其御恩返しをしたいと思ひます。これからも元の仕事をして居ては如何か、私を懐中に入れて連れて行つてくれたら丁半の出目をちやんと教へてやると言ふ。貞吉は目を覺まし

て見ると虎猫は枕元に來て坐つて居た。すると其處に朋輩が訪ねて來て、貞吉お前はどうして此二三日場所に見えぬ。さあこれからあべと言うて誘ふ。貞吉は元手が無いと言ふと百文貸してくれた。貞吉はそれを元手に猫を懐中に入れて朋輩とかたつて往くと、仲間の者等が、おい貞お前は何の事でそんな汚ならしい虎猫などをふところに入れて來たと笑ふ。貞吉はいゝ加減に言ひまぎらせて勝負にとりかゝると虎猫はふところの中に居て丁の起きる時は丁と鳴き半の出る時には半と鳴く。併しそれは誰にも分らずたゞ貞吉ばかり聴き分けられる。貞吉は猫に教へられてひどく勝つた。それから毎日毎日勝つ。忽ち富貴繁昌になつて家も修繕し商業を始めた。子供がなかつたから朋輩の家から養子を貰つた。そして自分は相變らず勝負をして歩いてはいつも勝ち續けてゐる。

ところが家が富榮えて來たにつれ、又貞吉が大凡留守勝ちなために、貞吉の女房が色男を持つた。度重なるに連れて貞吉が邪魔になり二人は相談して貞吉を殺して